
とある弱者の召喚士

下っ端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある弱者の召喚士

【Nコード】

N8488Q

【作者名】

下っ端

【あらすじ】

死んでしまったとある少年『深導 勇』しんどう いさむは前世の行いの良さから願いを一つ叶えてもらう事に：そして、彼の願いを聞き入れた神は彼を『とある』の世界へと転生させるのであった。

1話 深導 勇（前書き）

初めまして、下っ端です。こんな駄文ですがよろしくお願いしま
す m (| |) m

1話 深導 勇

真っ白な空間があった。

その空間にはちゃぶ台が置かれていた。

そして、ちゃぶ台の上にはお茶が二つ置いてあり――

「…アンタ誰？」

「ワシは神じゃ」

一人の少年と神が向かい合うように座っていた。

一人の少年ことこの俺『深導^{しんどう} 勇^{ゆう}』は現在、神様とお茶を啜りながら現状確認を行っていた。

「つまりお前さんは偶然足元にいた猫に気を取られて階段から足を踏み外し、偶然にも打ち所が悪くポックリ逝ってしまった訳じゃ」

いつの間にか用意されたホワイトボードには『少年の死因（笑）』と書いてある、とりあえず目の前の神は殴っていいのだろうか…？

「えと、要するに俺は死んでしまった訳ですね？」

俺はできるだけ冷静に目の前の神に確認する、一応相手は神なので下手な敬語を使っておく。

「そうじゃ…って凄く冷静じゃの死んだというのに」

「そりゃまあ、…人なんて何時かは死ぬ生き物ですし」

俺が頭をかきながら答えると神は呆れるようにため息を吐いた。

「全く…潔いというか何というか…まあこれでお前さんの現状は把握できたな？では本題に入るが…」

「あり？今のが本題じゃないんですか？」

「先までは現状確認じゃ、…ではまず一つお前さんに問うがお前さん何か望みはあるか？」

「望み…ですか？」

「そうじゃ、何でも好きなの言ってみるがいい！」

「…：ちよ、ちよっとタンマ！！」

俺は慌てて会話を中断させる、何この展開？何で望みを一つ叶えてやろう的な展開になってる訳！？俺死んだんじゃねーの！！？

「…えっと、できれば理由を聞かせてくれれば有り難いんですけど」

俺は右手を軽く上げて言った、神は「フム」と呟き続けた。

「理由は簡単じゃ、お前さんが生まれ変わる前…つまり前世のお前さんが物凄いい善人でそれに対する本の少しの褒美じゃ」

「俺の前世？…ってどんな感じだったんですか？」

「そうだな…例を挙げるなら困ってる人がいれば自分がどんな状況でも助けていたの、道に迷ってる人がいれば一緒に道に迷い、腹を空かしてる人がいれば有り金全て渡し、逃走中の犯罪者がいたら一緒に逃走したり」

…
…
…

「（それただの馬鹿じゃね？）」

俺は喉まで出かった言葉を飲みこむ。

：まあでも悪い話じゃないしな、何でもって言ってたし、多少無理な願いでもいいのか…？

「それじゃあ『とある魔術の禁書目録』の世界に転生したり…とかは…？」

「OK」

「いや軽いな！？」

つい素に戻って突っ込んでしまう、そんな軽さで大丈夫か？

「まあの、それ位なら楽勝じゃ」

そう言ってニカツと笑う神。

「いや二次元だし、原作あるし…」

「次元なんて関係あるまい、それにお前さんが行くのはあくまで平行世界…パラレルワールドじゃからな、それにワシ神だし」

「（んなてきとうな…）」

「さて、ではそろそろ行くがいい」

呆れる俺に神はそう言い放ち、そして…

「…ッ！？」

急な眠気の後、目の前が真っ黒になった。

1話 深導 勇（後書き）

朗読ありがとうございました。

2話 上条当麻（前書き）

とりあえず2話目投下、この勢いがいつまで続くか…

2話 上条当麻

……
……

「…ん…？」

瞼を開けると薄い光が目差し込んでくる。

俺はまだ眠気のある目を擦りながら頭を上げた、どうやら眠っていたらしい。

「…ははは」

自分の間抜けさに少し笑いが出た。今俺はバスの車内に座っている、寝起きで頭がスッキリしないがどうやら俺はバスで何処かへ向かっているらしい。

「…はは、だよな。うん、死んだだの神だの、揚げ句の果てには『とある』の世界に転生だの」

…変な夢だったなと自分自身に呆れている時、車内から次のバス停のアナウンスが流れる。

『次は、学園都市、学園都市』

…どうやら俺はまだ眠っているようだ…

そして俺は今、大きめのバックを持って寮への道を歩いていた。

さっきのバスのアナウンスが流れた直後、自分のポケットの中から『神からのメモ』を発見し、今はそのメモの通りに動いている。

そして数十分後、とある学生寮に辿り着いた。管理人から鍵を受け取り部屋に入る、部屋には生活に必要な道具からテレビやゲーム

などのちょっとした娯楽道具もあった。

「さて…」

俺は部屋の真ん中に座り神からのメモをもう一度確認してみた。

「『オッス、オラ神様ワクワクすっぞ！』とうとう宇宙一武道大会が始まっ…』……………」

俺は無言で永遠とフィクションが書かれた一枚目の紙を破り捨てた。

「『これから大切な資源を粗末にするもんじゃないぞ！』…」

再び無言で紙を破ろうとした、

…が後半からは真面目に書かれていたためそこから読む事にした。
「『じゃあ冗談はここまでにして本題じゃ、まず分かっと思うがそこは『とある』の世界じゃ、ちなみに日付は『超電磁砲』の話の一週間前辺りじゃな、そこはパラレルワールドじゃから原作介入したり『とある』のキャラとイチャついたり自分の思うままに行動せい』」

一々苛つくが理解した。ここは本当に『とある』の世界なんだな…二次元のはずなのに違和感がまるでない。

よし、とりあえず続きを読むか…

「『銀行には多からず少なからずの金を入れておいたし、高校への編入手続きも済ましてある、最後に能力じゃが…』」

お、とうとう来たか！

一応超能力が当たり前の世界だからな、何か期待するとうか…
ワクワクする！

「『お前さんの能力は『武器変換』ウェポンコンバートじゃ、その世界にない武器なら何時でも出現させる事ができる、能力レベルは出現させる武器によるな、ただし武器を出現させるためには相応の体力や気力といった力を使わなければならない』…中々おもしろい能力だな」

つまり俺の体力やら気力やら、自分の中にある『力』を使って武器を出すという訳だ。

「『…ワシから伝える事は以上じゃ、ちなみにこの手紙を一週間以内に十人に回さないとお前さんは不幸に…』…って何処の不幸の手紙だよ!？」

俺は手に持っていた紙を思いっきり床に叩きつけながら叫んだ。

引越し…というかこの世界に来て三日が過ぎた、この三日間俺は荷物の整理をしたり、能力の実験をしたりと部屋に籠り放したった(一度だけシステムスキャンのために外に出たのだが)。

ので、今は街の探索をしようと玄関から外に出たのだが…

「…うわぁ」

目の前とある一人の少年が盛大にこけて、先程買ってきたであろう卵を自身の体で押し潰すシーンに出くわした。

しかもこの人物は…

「えーと、大丈夫か? ツンツン頭の君?」

フラグ建築士一級の二つ名…:じゃなくて幻想殺し(イマジンプレイカー)の二つ名を持つ我らが主人公、上条当麻その人であった。

「…不幸だ」

ツンツン頭の君…否、上条当麻が潰れた卵を手にとって呟いた。

俺は今当麻の部屋で苦笑いしながらお茶を飲んでいる。

「ドンマイ当麻、たまにはそんな事もあるさ」

あの後、当麻の部屋が俺の部屋の隣だという事もあり意気投合、街は当麻に案内してもらおう事になった。

「…はあ、ユーは知らないだろうけど上条さんの不幸体質は今に始まった事じゃないですよ」

すっかり意気消沈した当麻が言った。まあそれが幻想殺しのデメリットな訳だしなあ…ちなみに俺は”いさむ”と呼ばれるのが嫌いなため知人には”ユー”と呼ばせている。

「さて、何時までも落ち込んでさっさと行こうぜ当麻」

そう言って俺は立ち上がる、しかし当麻はまだ卵ショック（勝手に命名）から立ち直れないでいた。

俺はハアとため息をしてから言った。

「今日は付き合ってもらうんだし晩飯位奢ってやるからさ、元気出せよ」

俺の”奢る”という言葉に当麻はピクツと耳を反応させる。

「…うう、サンキューユー！」

「だあー！その位で泣くなよ、後最後のはまさか駄洒落のつもりか！？」

そんなこんなで俺は当麻と街に繰り出すのであった。

3話 御坂美琴（前書き）

ノリノリで書いてて気づいた…「やべ超電磁砲友達に貸したまんまだ！」

3話 御坂美琴

side 美琴

「ヘイ彼女、お茶しない？」

一体何時の時代のナンパなのかと学園都市が誇るレベル5の第三位”超電磁砲”レベルガン 御坂美琴は溜息をついた。

彼女を囲む不良は7人、しかしレベル5の彼女には低能力者が何人集まってもさして問題ではない。

別に助けを呼ぶつもりはないが周りに視線を向けてみる、皆目を合わせないように……関わらないように速足で去って行く。

中には風紀委員や警備員ジャッジメントを呼ぼうとする者もいるが自らが助けに来るつもりはないようだ。

「（まっ、所詮はみんな自分が一番大事って事ね、この状況で関わろうとする者はよほどの高位能力者か……）」

「…寄ってたかって女の子を虐めるもんじゃありません！ そう思いませんか上条さん？」

「全くその通りですな、深導さん！」

.....

—よほどのバカだね—

side out

「冒頭5分前」

「…まあだいたいこんなものかな、時間が無かったからこの辺一带しかみて回れなかったが……」

「いや、十分だよ。サンキューな当麻」

俺は今、今日会ったお隣りさんにして主人公の上条当麻と一緒にファミレスに向かってる所だ。

「そーいやユー？」

「んー、何だ？」

「ユーの能力ってどんな能力なんだ？」

「…あー、えーと……」

さて、俺が自身の能力についてはぐらかしているのには勿論理由がある。

まず、別世界から来たという事は秘密のため”『とある』の世界以外の武器を出す”という説明ができないからだ。

二つ目は能力を使うと体力やら気力やらを持っていかれるのであまり使いたくない。

以上の理由から俺は能力を隠している。

「…分かった！さてはユーもレベル0なんだな！」

「いや、それはない！でもまあシステムスキヤンはレベル1だったんだけどな！」

「……ってそれじゃ俺とほとんど変わらねーじゃねーか」

「いや、お前幻想殺しあるだろ……っとファミレスが見えてき……」

俺は途中で言葉を切った

「ユー、どうかしたか……ってビリビリ！？」

ビリビリ…レベル5の”超電磁砲”御坂美琴が不良に絡まれていた。

「という訳で俺らは今不良共と睨み合ってる訳だが…」

「…ユー、一体誰に対してのナレーションなんだ？」

「…細けえこたあ気にすんな」

「…さいですか」

とりあえず『御坂に絡んでいる哀れな不良を助けてやろう』ということで首を突っ込んだのはいいが……

「ああ！？」

「何ですか何ですか！？」

「バカなんですか！？」

「なあ？こいつら埋めちまおうぜ」

「おれあサンドバックがいいなあ！」

…不良の皆さんガチギレモードだ。

「……ちょ、ちょっとタンマ！」

俺は左手を前に出して当麻と作戦を立てる。

「（おいおい、どうする当麻？奴さんガチだよガチ）」

「（どうするつつても…やっぱ逃げるか！）」

作戦は戦略的撤退に決まり、いざ駆け出そうとした時――

バチバチバチバチ

「「「「「ギヤアアアアア」」」」」」

放電の後に不良共の断末魔、そして、

「全く、アンタはまたこんな不良を助けようとして」

超電磁砲の御坂美琴が呆れながら言い、続けた。

「…だいたい、アンタ誰よ」

美琴が俺の方を向いて言う、まあ初対面だしな。

「…誰って言われても…深導 勇としか言えねーよ」

俺の答えに「フーン」と興味なさ気に呟き当麻に向き直る。

「まあこいつが誰だなんて関係ないわ、私はアンタと勝負できればそれで……って消えた！？」

「…消えたと言うよりお前が注意を俺に向けた隙に当麻は猛ダッシュで逃げてもう見えなくなっていると言った方が正しいな」

俺が冷静にツツコミを入れると美琴は、

「なっ！？」

と言って絶句した。

そして怒りの形相でこっちを向いて……

「アンタ！あいつ逃がした責任取りなさいよ！」

何か理不尽な怒りを向けられた。

「お会計” 4560円” になりまーす！」

「……………」

俺は無言で5000円札を取り出し、笑顔が素敵な店員さんに渡した。

「いやぁ悪いわね、奢って貰っちゃって」

「…悪いと思ってるなら食べた分返そうぜ？」

バチバチ

「…何か言った？」

「いえ、何も…」

当麻を逃がした責任として俺は美琴に飯を奢る羽目になった（しかも高いのばっか頼みやがって！）。

「っていうか美琴、時間は大丈夫なのか？」

「ああそれなら問題無いわ…って誰が美琴よ！？」

「え？お前レールガンの御坂美琴じゃねーの？」

「確かに私は御坂美琴だけどいきなり呼び捨てはないんじゃない？」

「だってお前年下だし、俺が苗字で呼ぶのは年上だけだからな」

俺は至極当たり前のように言い、美琴がそれに反発する。

「…わ、私は学園都市でも七人しかいないレベル5の第三位なのよ？」

「…ああ、それがどうした？」

「それが…ってまさかアンタもレベル5!？」

「っふ、俺は1以外の数字に興味はないんだぜ？」

「…それってつまりレベル1って事なんじゃない!」

「どやっ!？」

「どや顔すんな」

…何か頭の方からバチバチ聞こえてくるから弄るのはこの辺でやめとか

「…さて、じゃあ行くぞ美琴」

「名前で呼ぶな!…行くって何処によ？」

「いや、夜も遅いし送ってやるよ」

俺の申し出に美琴は馬鹿にしたような口調で言う。

「送ってやる…って私はレベル5の能力者なのよ?それをレベル1が送ってやるって普通逆なんじゃないの?」

……まあ正直本気出せばレベル5クラスある自信があるけど簡単に見せるのは何か癪だ（疲れるし、目立つの嫌だし）、そこで俺は一ついい事を思いついた。

「じゃあお前は一人で帰るのか？」

「まあそうなるわね、何?もしかして一緒に帰りたいの?」 何を

勘違いしたのかニヤつきながら美琴が聞いてきた。

「まさか、一応聞いたただだよ。じゃあ俺”達”は帰るから」

「ええ…つて、え…達？」

「ああそういえば俺の能力、まだ教えてなかったな」
俺は困惑する美琴の前で左手を前に出し呟いた。

「サモン
召喚！」

4話 召喚士

「^{サモン}召喚！ハネクリボー！」

俺の掛け声の後、左手の前の空間が光り、光が形に変わっていく、そしてそれは”遊戯王デュエルモンスターズGX”でお馴染みの羽の生えた茶色い毛むくじらの生き物『ハネクリボー』になった。

「っな！？」

「ん？どうした美琴？」

俺は驚愕のあまりに開いた口が塞がらない状態の美琴にニヤニヤしながら聞いた。

「ど…どうしたじゃないわよ！何なのよこのかわ…変な生き物は！？」

…こいつ今絶対”可愛い”って言おうとしたな…

そう、俺は知っている（原作知識で）…美琴は可愛い系の物が大好きだという事を…！

「変って言われても…これが俺の能力『^{サマナー}召喚士』なんだから仕方ないじゃん」

「さ…召喚士！？」

「ああ、詳しい事は知らないけどこことは違う世界、もしくは次元からモンスターを召喚する能力だって研究者共は言ってたぜ？」

勿論、俺が能力を悟らせないために使ったダミー能力である。

武器変換…武器…カードが剣ならば、デュエルディスクは盾

！？（b y武藤遊戯）……………なら武器変換でデュエルモンスター出せないか…！？

という訳で駄目元で試してみたら成功したのである。

「クリクリ〜♪」

ハネクリボーが美琴に近づきほお擦りする、

得体の知れない生き物に最初は戸惑った表情をするが美琴はすぐに表情を和らげた。

「……はい、そこまで！」

いい感じに美琴が心を許し始めた頃合いを見計らって、俺はハネクリボーを取りあげた。

「……あ」

「さてと高位能力者のレベル5様は送らなくてもいいって言ってるし帰るとしますか」

「……ね、ねえ……その別に私送らなくていいとも言っていないんだし、その…送られてあげなくもないわよ！？」

帰ろうとする俺に美琴が声を掛けてきた、ってかすげえ上から目線。

「いやあ、別にいいですよ！レベル1の俺なんかが居ても迷惑でしょうし、どうせ俺はレベル1ですしね」

わざと嫌みな言い方で言ってみた。

てっきり突っかかってくると思ったのだが…

「う……そう、よね」

……………あり？

「…アンタの事も考えずに、レベル5である事を自慢して…レベル1のアンタを馬鹿にして…」

……………おいおい

「そもそも…当麻^{あいっ}に逃げられたのも私のせいだし…」

……何か俺が悪いみたいな雰囲気が…

「……本当に…ごめん…」

「……………（ええええええ！?）」

何この空気!? 何で別れる寸前のカップルみたいな空気になってんの!? いや彼女とかいないしいなかったけど……………ってその奴!、何「可哀相」とか呟いてやがる!!

「…ハア」

俺は溜息を吐いて、そして美琴の頭の上に手を置いた。

顔を上げた美琴の様子は酷く落ち込んでいる。

しかも半泣きだ。

「別に俺は怒ってもねーし、傷ついてもねーよ……ハネクリボー?」

俺がハネクリボーに一言掛けるとハネクリボーは美琴の前に飛んで行く。

飛んできたハネクリボーを美琴が優しく抱き抱えた。

「さて、大分時間食っちゃったし行くぞ」

「…行くって…何処に?」

「何度も言わすなって、送ってやるから」

俺はそう言って美琴の髪をクシャクシャと撫でる、にしても美琴ってこんなにメンタル弱かったっけ? パラレルワールドだからか…?

「…ねえ」

俺が物思いにふけていると美琴が口を開いた。

「…ありがとね、いさむ」

「ああ…それと俺の事はユーって呼んでくれ」

俺はヘラッと笑い言った。

さて、御坂を送った後俺は自分の寮へ帰ってた訳だが…………

「…………どうしてこうなった」

俺の目の前にはいかにも『真面目で優秀で勉強ができますよ』といった眼鏡や優男が八人、ちなみに場所は人通りがない路地裏で皆さん方全員凶器を持っている。

「…ねえ君」

不意に目の前の眼鏡が話しかけてきた。

「能力のレベルは何？」

「…………？能力のレベル？1だけど、それがどうかしたのか？」

俺の1という単語に集団から微かに笑い声が聞こえる。

「…………何が可笑しい？」

できるだけ平静を装いながら聞いた、御坂の時とは違う、目の前の連中からは陰湿さと哀れみ…………そして蔑みの感情が見え隠れしている。

「…だってそうだろ？君はレベル1の分際であの御坂さんに声を掛けたんだ、滑稽すぎるよ」

「…………つまり？」

…………妬みか？

「御坂さん、彼女はレベル5で序列は第三位、対して君は単なるレベル1、それもマスコットを出す能力者」

目の前の眼鏡の後ろで声を押し殺す事に諦めた連中が笑い声を上

げた。

「きっと彼女は君の事を内心馬鹿にしていただろうね」

「…俺の事はユーって呼んでくれ……………つぶ…キャハハハハ！」

眼鏡の言葉の後に後ろから俺の言葉を真似する声、そして笑い声が響く。

「そしてこれはそんな彼女に近づいた君への制裁だ……………おっと抵抗なんて考えない方が身のためだよ。後ろの連中は全員レベル3、そして僕はレベル4だ。」

「なるほどな」

俺の一言に全員がこちらを向く、そして俺は一呼吸置いて続けた。

「…まださっきの不良の方が質がいい、あいつらは俺の事怒らせなかったし……………」

「ああ？僕達よりあんな不良の方がマシだと？……………御坂さんに「それ以上喋るなクズが」…！？」

笑い声が消える、俺は俯いていた顔を上げた。

「…てめえら全員、俺が粛正する…！」

「…………レ」

目の前の眼鏡が右手を俺に向けた。

「…レベル1がああああ…！」

激昂した眼鏡の手から火の玉が放たれた。

俺は眼鏡から放たれた火の玉を間一髪で避ける。

そして俺は近くのビルの中に全速力で行って行った。

「っな！？…おい何ボサツとしてやがる！行くぞ」

俺の行動に眼鏡は一瞬驚くがすぐに冷静さを取り戻し仲間と共に

追い掛けてきた。

「…それでいい」

俺の呟きは連中には聞こえなかった。

………

………

………

「…追い詰めたぞ！」

俺は今ビルの屋上にいる、そして目の前のドアから八人の能力者が入ってきた。

「よお随分遅かったじゃねえか、運動不足じゃねえの？」
俺の挑発で一気に場の空気が悪くなる。

「…殺してやる！」

眼鏡が唸った、そして俺は笑った。

「…っさて！」

俺は漆黒の空を仰ぎ見て叫んだ。

「追い詰められたのはどちらでしょうか!？」

5話 白井黒子（前書き）

とりあえず今日はここまでかな、休みって素晴らしい！

5話 白井黒子

side 黒子

「…お…お姉様 ああああ!？」

彼女、白井黒子は自室の窓に張り付いて奇声を上げていた。

何故ならば「お姉様…今日も深夜帰りですのね、全く黒子は心配で胸が張り裂けそうだというのに」と彼女の憧れの人である御坂美琴の帰宅を今か今かと窓に張りついて監視していると、その憧れの人である御坂美琴が有ろう事か男と一緒に帰宅してきたからである。

「な…何なんですかあの類人猿は!？」

彼女のその声は当然当の本人には届かず、美琴と軽く挨拶を済ませてそして……

「…#%×▼≫∞⊥▽∨∈※」↑声にならない悲鳴

男は美琴の顔に自分の顔を数秒近づけて去って行った。

「あれ?、黒子まだ起きてたの?」

部屋に入った御坂美琴が彼女の変化に気づく事は無く。

「ええちよつと風紀委員のお仕事が…ジャッジメント…所で今しがた寮の前で別れた殿方は一体何者ですか?」

「え?べ…別に誰だっていいじゃない!」

そして美琴の明らかに動揺している様子に黒子はいち早く気づくのであった。

「……いえ、ただ風紀委員も人員不足…ですので人手が今は欲しい

所なんですの、もしよければお姉様にその殿方を紹介していただきたいんです」

「…あ、ああそういう事ね、彼確か召喚士って珍しい能力だからバシクを使えば一発じゃない？名前は深導 勇って言ってたわ」
そう言って美琴は浴室へ向かった。

普段の白井黒子なら全力で浴室へ侵入するのだが…

「ふっふっふ…深導 勇…！」

今の彼女の頭の中では憎き男の名前が踊っていた。

プルルルル…ガチャ

「…あ、白井さんですか？」

彼女の電話の相手は同僚の初春飾利、どうやら近くの路地裏で能力者同士の戦闘があり応援に向かって欲しいとの事だった。

「…ええ、分かりましたわ初春」

寮の門限はとくに過ぎていたためこっそりと抜け出そうと思っていた彼女には吉報であった、何故なら…

「（これで堂々とあの類人猿をまっさ…連行できますわ！）…：まあまずはお仕事の方を先に片すとしますわ」そして彼女は闇の空に飛んだ。

side out

目の前の眼鏡が俺に向かって火の玉を飛ばす、直撃すれば確実に軽傷じゃ済まないそれを見て俺は呟いた。

アドバンスドサモン
「…上級召喚…：出ろ！真紅眼の黒竜！」
レッドアイズ・ブラックドラゴン

side 黒子

「…あれは!？」

ビルからビルへとテレポートで飛んでいた白井黒子の目に映ったのはビルの屋上で天を仰ぐ少年とその少年に対してパイロキネシスを使う少年、そしてその取り巻きで有ろう後ろの少年であった。

「多分あれが初春の言っていた件のようですね…！」

できるだけ早く狙われてる彼の元にテレポートしようとした時、彼の叫び声が聞こえ……

そして彼と火の玉の間に真紅の瞳を持つ、漆黒の竜が現れた。

side out

「っな…何だこれは!？」

目の前の眼鏡が叫んだ、火の玉はレッドアイズに直撃したがダメージは与えられていない。

俺はニカッと笑いレッドアイズに命令した。

「レッドアイズ! 黒炎弾！」

命令後レッドアイズは先ほど俺達が出てきたドアに向かって眼鏡の火の玉の何十倍もの威力の炎を放つ。

「……あ…ああ…！」

目の前の眼鏡の表情が絶望に満ちていく、後ろの連中も同じだ。すでに気絶してるやつもいるが。

「さて、そろそろ終いに「そこまでですの!」

……ん？」

俺は声がした方を向いた、あれは……

「風紀委員ですの！器物損害、及び……デモンズ・チェーン！」……
ってきやあ！」

俺は黒子が言い終わる前に能力を発動する。

「すぐ終わるからさ、ちよっとそこで待っててもらえる？……あ、ちなみにその鎖は能力を封じるものだから抵抗なんて無駄だよ」

俺の言葉に苦い顔をする黒子、能力が使えないと試して分かったらしい。

「……じゃあ続きといくか」

俺は目の前の連中に目を向けた。

「……ってリーダーの眼鏡以外気絶してるのかよ」

俺は呆れ気味に言った。言葉通りリーダー以外のメンバーは全滅している。

「まあいいか、どうせ殺すつもりは無かったんだし」

俺がそう呟くと顔面蒼白の眼鏡の顔に生気が戻る。

「だが、許すとは言ってねーよ俺は」

そう言っただけ俺は続けた。

「まず一に高レベルだからと言って低レベル能力者や無能力者を馬鹿にするのはやめろ、次にもう俺に関わるな、最後に……美琴のためとか言っってこんな馬鹿な事をまたした時には……」

俺はスッと先ほどまでドアがあった場所……今は焼けて黒くなっている場所を指差した。

「……お前らもああなるからなあ！？」

「は……は……は……」

眼鏡はその言葉を最後に気を失った。

「さて、事後処理（連中には記憶抹消というカードで先程までの記憶を無くしてもらった、恐怖は体の芯まで叩きこんだからもう大丈夫だろう）も済んだし、後はお前だけだな」

俺は目の前の鎖で繋がれた少女を見た。

「私を…どうなさるつもりなんですか？」

「…どうもしねえよ、いや出来ねーかな？」

「？…どういう事ですか？」

「説明は後だ、とりあえずは今からその鎖を解くからその後俺を何処でもいいから運んで欲しい、後俺がここに居た事は黙っといてくれ」

「な！？そんなことできるわけ…」

「んじゃ！…頼んだぞ、起きたら事情は話すしお前の頼みを何でも一つ聞いてやるから………よ」

俺は最後にデモンズチェーンを解く、同時にレッドアイズも消滅させ、一気に体力と気力…そして足りない分は生命力を持っていかれてその場に倒れた。

5話 白井黒子（後書き）

まだ原作に入っていないという奇跡！…とりあえず遊戯王を知らない人のためのアバウトなカードコーナー！
レッドアイズ↓カッコイイ中二：黒い竜

デモンズ・チェーン↓効果と攻撃を封じる罠

記憶抹消↓名前だけ

6話 風紀委員（前書き）

……何とか今日中に終わった……

6話 風紀委員

.....

「……っは！？……ここは……？」

「お？気がついたかの？」

「…アンタは…神か」

何時ぞやの真っ白な空間に俺は再び来ていた、目の前では神がお茶を啜っている。

「…えーと、何で俺ここにいるんすか？『とある』の世界に行ってたはずじゃ…」

「…お前さん…いくら何でもはしやぎすぎじゃの、もう少しで死ぬところじゃったんじゃぞ」

「………はい？」

…要約するところだ。

慣れてない状態で能力ガンガン使いすぎて俺の体力や気力、終いには生命力のほとんどが枯渇してしまったらしい。

「…まあ今回はサービスで助けてやるが、次は無いぞ？」

突き付けられた現実におrzの格好でショックを受けている俺に對して神が言った。

「…！…え、じゃあ……」

喋り始めるとともに身体が薄くなっていく。

「ふむ、今回一度きりじゃ」

神は俺に向かってウインクした。

「…あ、ありがとうございます！」

そして俺が礼を言い終わるとほぼ同時に、俺は消えた。

……
……

「……うにゃ？」

妙な声を発しながら俺は目を開ける、見た事のない部屋、自身の状況を頭の中で整理しているとドアを開ける音が聞こえ：

「おや、目が覚めたのかい？」

そこには蛙顔の医者：冥土帰し（ヘブンキャンセラー）がいた。

「正直な所言うとな、僕は君が助かるとは到底思えなかったんだよね」

「…いきなりぶっちゃけますね」

俺は笑いながら答えた。

「…その様子ならもう身体は大丈夫そうだね」

冥土帰しがそう呟いた瞬間、目の前にいきなり黒子がテレポートしてきた。

「……、では、行きますわよ」

黒子は無言で俺の状態を確認して俺の腕を掴む。

「へ？行くつつつても俺まだ入院して…」

「その点は大丈夫ですわ、行くとっても病院の屋上ですから」

「いや、ちょ…ま…」

俺が言い終わる前に、俺は黒子と共にテレポートした。

「…では、約束通り白状してもらいますわよ」 俺は今、病院の屋上のベンチに腰掛けている。

そしてその真ん前には仁王立ちの白井黒子。

「…ん…まあ約束だしな、とりあえず俺の能力レベルは……恐らくレベル5クラスはあるな」

「…ッ！」

俺の答えに黒子は絶句する、多分予想は出来ていたとしてもまだ半信半疑だったんだろう。

「で、では何故レベル1等と嘘をついているんですの!？」

「ん？それは嘘じゃねーよ、システムスキヤンの時は手を抜いたかな学園都市のデータにはちゃんとレベル1で登録されているはずだ」

「…何のためにそんなことを？」

「そりゃあ…だって…」

俺は一度欠伸をしてから答えた。

「…面倒くさいじゃん」

「…は？」 黒子は俺の予想外の返答に素っ頓狂な声を出した。

「いやだってほら：レベル5ってだけで嫌でも目立つし、無駄に突っ掛かって来る奴もいるし」

「…そ、そんな理由で!？」

「ああ、だって勝負挑まれるのめんどいじゃん」

「はあ…：そんな理由で…」

黒子は呆れたように溜息を吐いた。

「じゃあ俺は戻るぞ？」

「お待ちなさい！」

そう言って戻ろうとする俺の肩を黒子が掴む。

「…：まだ何か用か？」

「ええ、貴方の能力：あれもフェイクなのでは？」

俺は無言で黒子に向き直る、流石に風紀委員をやってるだけあつて鋭い。

「…：根拠は？」

「貴方はあの時あの場所にいた八人の学生の記憶を消しましたわよね？」

「…やっぱそれか…」

確かにレッドアイズやデモンズチェーンは召喚してたけど、記憶抹消は手から使ったもんな。

「…まあちゃんと答えは用意してんだけど。」

「あれも召喚士の能力だよ、『記憶を消すことのできる腕』を自分の腕に重ねて召喚したただけだ」

「ッ！そんな事が…」

「可能だよ」

即答した、嘘だけど。

黒子はまだ完全に信用してないようだが一応は納得したようだ。

「納得したなら俺はもう行くぞ？ ちょっと寝たいから」

「あ、まだ一番大事な用件を伝えていませんわ！」

俺は再び肩を掴まれた。

「：申し遅れましたが私白井黒子と申します、貴方は？」

「：深導 勇、いさむって呼ばれるのは好きじゃないからユーと呼んでくれ」

そういえば自己紹介まだだったな：ってか遅くね？

「ではユー、風紀委員に入りなさい」

「いきなり？ しかも命令系！？」

俺はいきなりの黒子の申し出に驚きながら答えた。

「ええ、確かユーは『何でも一つ言うことを聞く』と言いましたですわよね？」

：あーー

「言った気がする：ノリで」

「ちょうど人手が足りない所でしたし、貴方の監視も出来て二石二鳥という事ですわ」

「めんどいけど：仕方ないか：何時からだ？」

「明日からですわ」

「へいへい：ってはやっ！？」

「人手不足と言ったはずですわよ？ 明日からビシバシ働いてもらいますわよ？」

俺はショックのあまりに地に手をついた。

「じゃあ明日からよろしく願いしますわ、ユー」

こうして、俺は（強制的に）風紀委員に入ることとなった。

6話 風紀委員（後書き）

主人公は（表向きは）弱者です。

7話 原作突入

「…それでは皆さん、今日から転入生追加なのですよー！、では転入生ちゃんどうぞー」

小萌先生がそう言ってこちらに手を向けた、俺はその声の後に教室に入る。

「…ども！転入生の深導 勇です、気軽にユーと呼んでください」

俺はそう言ってヘラツと笑った。

今俺がいるのは神が手配した編入先の高校、そしてそこは偶然か必然か当麻と同じ高校であった。

「深導ちゃんは本当は三日前には転入してくる予定だったんですが、怪我で入院してたみたいで少し遅れてしまったみたいなのです！だから皆さん仲良くしてあげてくださいね？」

小萌先生が俺についての説明を終えると「深導ちゃんはそこにいる上条ちゃんの後ろの席なのです！」と言ったので俺は言われた通りの席へ向かった。

「では、ホームルームを始めますよー」

ホームルーム後、前の席に座っている当麻が話し掛けてきた。「よっユー、久しぶりだな！…まさか同じ学校だったなんてな」

気さくに挨拶してくる当麻、俺はそんな彼に一枚のレシートを突き付けた。

「…4560円？何だこれは…誰かさんがいきなり逃げたお陰でとある中学生に支払わされた金額だよ」…」

俺の言葉に途端に顔を青ざめる当麻。

「勿論…全額払ってくれるよな？」

俺はニツコリと笑いながら言った。

「…ふ…不幸だあああああああ！」

そして当麻の悲痛な叫び声が教室に響き渡った。

「…さて、何をするか」

俺は公園のベンチに腰掛けて呟いた。

システムスキャン

今日は定期的にある身体検査の日、なのだが俺はついこの間やっただけ…なので今は暇を持て余していた。

「…クレープでも食うか」

目の前にあるクレープ屋を見ながら俺は呟いた。

正直人（というか子供）が多くてめんどいけど暇潰しにはなる。

「（…そういえばそろそろ原作に入る頃じゃなかったっけ）」

そんな事を考えて並んでいると俺の番が回ってきた。

「はいチョコバナナクレープ…と限定品ゲコ太ストラップ、これが最後の一個になりまーす」

あんましょく覚えてねえけど多分これ『超電磁砲』の一話で出てきたクレープ屋だよな？

…という事はあの四人が…

そう思い振り向いた先には案の定、例の四人組がいた。

「…あ」

俺の存在に気づいた美琴と黒子が同時に固まる、後ろの二人：佐天涙子と初春飾利は状況が掴めずキョトンとした。

「な〜ん〜で貴方がここにいるんですの!？」

会った瞬間、黒子から怒りのオーラが立ち上る、まあ理由は分かっているが。

「…確か私言いましたわよね『明日は貴方を風紀委員にするための簡単な心理テストがあるから私が務めている風紀委員の支部に行ってください』と!」

「まあ言われたわな、行くとは一言も言ってないけど」

「っな!？ 私確かに『分かった』という返事を頂いたと思うんですけど!？」

「ああちゃんと『話の内容』については分かったと言ったよ、『行くか行かないか』については何も言ってない」

俺はクレープをもそもそと食べながら言った、黒子が「そんなの屁理屈ですわー!」とか言っているが気にしない。

「申し訳ありません、ゲコ太ストラップはもう無くなりました」

俺と黒子がそんなやり取りをしているうちに他三人は先に並んでいたようだ、そして店員のその言葉に美琴が大ダメージを受けている。

「…おーい美琴さーん？」

俺は地面に手を付きショックを受けている美琴に言った。

「欲しいなら俺のゲコ太ストラップあげようか？」

「…!？」

とてつもなく素早い動きで俺が手に持っているゲコ太ストラップを見てきた。

「な…何言ってるのよ、私がそんな両生類を欲しいわけが…」「じゃあいらないんだな?」……ありがとうございます」

ストラップを持っている手を空高く上げて「はい上げたー」をしようかとも思ったが後が怖いので止めておく事にした。

「…では遅くなりましたがこちら『深導 勇』本人からの要望でユーと呼んでやってください、後初春にはもう話しましたが私が風紀委員に推薦してる方ですわ」

「…やる気ゼロだな」

「それは後ほど調教…学習して差上げますわ」

何か不穏な発言が聞こえた気がしたがスルーすることにしよう…
おや冷や汗が…

「そしてこちらが私の同僚の風紀委員『初春飾利』とそのご友人『佐天涙子』ですわ、お姉様の事は存じておいでですわね?」

黒子の言葉の後に初春と佐天が「ユーさんだね、よろしく!」「よろしくお願いします、ユーさん」と挨拶をしたので俺も「おう!」と右手を挙げて答えた。

「ん、まあな…中学生に因縁つけられて奢らされるなんて経験中々できるものじゃないしな」

「あ、あの事はちゃんと謝ったでしょう!?!」

「おう、しかもあの金はちゃんと当麻に請求したからモーマンタイ(問題なし)だ」

俺はそう言って美琴に向かってVピースした。

「コホン…まあお姉様とユーの関係については後で言及するとして…」

「知り合い以上、友達以下だ」

俺は間髪入れず答えた。

「ユーは早く第一七七支部に向かってください！」

「…えー…」

「あからさまに嫌な顔しないでくださいすわ！」

「…そういえばどうして白井さんはユーさんを風紀委員に入れようと…いや入れたがっているんですか？」

初春が不思議そうにしながら黒子に聞いた、黒子は「え？それは…」という風に返答に困っていた。

まあ俺の能力レベルについては口止めしてあるし、俺の監視だなんて言える訳ないしな。

という訳で流れを原作に戻すために俺は近くの銀行を指差して言った。

「それはそうとき、あそこの銀行って昼間からでも防犯シャッター閉まってるもんなの？」

俺の言葉にその場にいた全員が銀行の方を向いた。

瞬間、ドガアンという轟音の後に男が三人、札束が大量に入ったバックを持って現れた。

「ッ！…初春はアンチスキルへ連絡を！ユーは怪我人の有無の確認！」

「…黒子！」

「お姉様はそこにいてください」

「…えー…」

「ユーは本来ならば今日から風紀委員、お姉様はあくまで一般人なので駄々をこねないでください！」

場が場なので俺は急いで言われた通りに壊れた防犯シャッターから銀行の中へと入った。

「…どうやら幸い、重傷者はいないっぽいな」

爆発時の衝撃などでの軽傷者はあるものの、今すぐ手当てが必要と言えるような重傷者はいなかった。

外に出るとちょうど発火能力者パイロキネシストを黒子がレポートからのドロップキックをする場面だった。

そして倒れて拘束した相手に「直接体内にレポートさせますわよ」とか言って脅しを聞かせてる、黒子マジパネエ…

…とこんな事してる場合じゃねえ。

「（確か原作では佐天が犯人に顔を蹴られるからな、できるだけ阻止しないと…）」

既に俺という非登場人物がいるんだ、それにここはパラレルワールド…それなら出来るだけの事はしよう。

「……いた！」

辺りをキョロキョロと見回すと草の茂み近くに佐天を発見、そしてちょうど子供が出て来て――

「ッ！召喚！ハネクリボー！」

俺は急いでハネクリボーを召喚する。

「ハネクリボー！向こうにいる黒髪長髪の女の子を守ってくれ！」

「クリクリー！」

ハネクリボーは頷くと佐天の元へと飛んで行き、俺も後に続いた。

side 佐天

いなくなった男の子を御坂さん初春と一緒に捜していると後ろで子供の声が聞こえ、後ろを見てみると――

「…いいから来いって！早く」

一瞬御坂さんと呼ばうと思ったが…

…レベル0にだって

…私だって

気づけば私は子供の元へと走っていた――

「あ、何だてめえ、離せよ!」

……みんなの役に立てるんだ!

「ダメエエエ!!」

そして強盗犯が足を振り上げた!

……

…あれ?

「…クリクリクリー!」 目を開けると眼前で羽の生えた毛むくじやらの生き物が薄いバリアのようなもので私を守ってくれていた!

「…よくやった! ハネクリボー!」

s i d e o u t

蹴られる寸前の佐天を先に向かわせたハネクリボーがバリアを張って助ける。

ハネクリボーあんな事できるんだな…↑今知った

…さて、まずは…

俺はハネクリボーに気を取られている強盗犯の顔目掛けて…

「一発ぶん殴る!」

右ストレートをぶち込んだ!

強盗犯はおもしろいくらいに吹き飛ん…ってか手痛え、人殴った事無かったから改めて知ったけどマジで痛い。

「…っと、もういいぞハネクリボー」

俺がそう言うのとハネクリボーの体は次第に薄くなら終いには消えた。

「それに佐天も男の子も無事だな」

俺はそう言って佐天とその佐天と傍の男の子を見た。

「あ、あの「ちよいストップ！」」

何かを言いかけれ佐天を俺は右手で制した。

「とりあえず事件が解決した後でな」

そう佐天に言って俺は目を強盗犯へと向けた。

「つーわけで美琴、締め…頼むわ！」

いつの間にか近くまで来ていた美琴に俺は言って…

「頼まれなくても、最初からそのつもりよ、」

コインを弾きながら美琴が答えた。

強盗犯が車に乗ってこちらに突進してくる、そして弾いたコインが自然落下して…

「…構わねえ、吹っ飛ばせ！」

俺が呟くのと同時に美琴から超電磁砲レールガンが放たれ、車を直撃した！

「本当にありがとうございました！」

責任者の女性が佐天に深く礼を言った、傍の男の子も「ありがとうお姉ちゃん」とお礼を言う。

アンチスキル

数分後警備員が到着し事件は解決した、そして今は男の子とその子供達の責任者（というか先生か何かだろうか？）に佐天がお礼を言われていた。

「え、いやでも私：何にも出来なかったし：」

そう言って佐天は否定するも満更ではなさそうだ。

「うん、お手軽だったよ佐天さん、凄くかっこよかった」

「：御坂さん：」

「ああ俺も美琴と同意見だな、『出来なかった』と『しなかった』は天と地ほどの差があるし：何より佐天の行動のお陰で子供が人質に取られずに済んだんだしな！」

佐天は俺と御坂に褒められると照れたような顔をした。

「あの御坂さん、御坂さんもその：かっこよかったです！：……あのユーさん？」

「ん？」

「あの時私を守ってくれた生き物：ハネクリボー？はユーさんが：？」

そう言えば美琴と黒子以外には能力について話してなかったな。

「ああ、俺の能力はレベル1の召喚士って能力でハネクリボーは俺の能力で召喚できるモンスターだ：バリアは予想外だったけど」

「やっぱり：あのありがとうございました！」

「あゝ、さっき言おうとした事はそれだったんだな：別にいいよ友達助けるのは当たり前で佐天はもう友達だからな！」

ニッと笑いそう言った俺に対して何やら考えてから佐天が言った。「ユーさん、私も白井さんや御坂さんみたいに名前で呼んでもらっていいですか！？」

「ん？別にいいけど、いいのか？」

「はい！」

御坂が横で「私の時はいきなり呼び捨てだったわよね！？」とか

言ってるけどスルーする。

「分かった、よろしくな涙子！」

「こちらこそよろしくですユー！」

…何か佐天、いや涙子との距離が縮まった気がした（当然友達として）「（ついでに初春の事も飾利って呼び捨てにするか、最初はびっくりしそうだけど（笑）」

何て事を考えていると突然黒子が横にレポートしてきて：

「ではユーは私と一度一七七支部について来てください…お姉様と佐天さんは申し訳ありませんが今日はこれで」

と俺の返事も聞かずに黒子はそのままレポートした。

そしてその日、心理テストの後に腕章の受け渡し、書類書きに黒子から美琴との関係についての尋問等のせいで帰宅する頃には俺は真っ白な灰となった。

7話 原作突入（後書き）

初めて貰った感想の喜びのあまりPSPを友達宅に忘れてきた作者です。感想は作者に勇気と希望を与えてくれます。どういう事かと言うと、感想ありがとうございます、またの感想をお待ちしております！

8話 木山春生（前書き）

何か今回異常に書き難かった。

8話 木山春生

風紀委員になってだいたい二週間が過ぎた。

とあるの時系列はややこしいので今いち覚えてないが、一週間前くらいに『涙子の眉毛落書き事件』（命名…俺）が発生したので多分アニメ軸で時間は進んでいるようだ（確かこの出来事はアニメオリジナルだったはず）。

そして今俺は…

「だから暑いからっていきなり服を脱ぎ出さないでください！」
脱ぎ女、木山春生と共に行動していた。

「…畜生当麻のやつめ厄介事押し付けやがって」
俺は木山春生に聞こえない程度の声で呟いた。

「数十分前」

「あ、おーいユー」

当てもなくぶらぶらと街を練り歩いていたら偶然会った当麻から声を掛けられ…

「ユー、お前今暇か？」

「まあ暇だな、どうしたんだ当麻」

「いやあ実はこの人が車停めた駐車場が分からないって言うからさ、この人と一緒に駐車場探してくれないか？」

「…は？」

「俺行かなきゃいけない所があつてさ、後はよろしくなユー」
そう言って当麻は走り去って（逃げて）行った。

そうして仕方なく俺は木山さんと一緒に駐車場を探してる訳だ。

「全く、暑いからって公衆の面前でいきなり服を脱ぎ出さないでください」

「別に起伏の乏しい私の肢体を見ても劣情を催す男性がいるとは…まさか君…」

「んな心配しなくてもアンタの身体にゃ興味ねーよ！常識として考えてくれ！」

「…真昼間から何言ってるのよアンタは？」 突如後ろから声が聞こえ振り返ってみると…

「…なんだ美琴か」

「な、なんだとは何よ！なんだとは！？」

「なあ美琴お前今暇か？暇だな！」

「勝手に決めつけんな！…確かに暇だけど」

何かこの二週間の間にツン成分が増えた気がするのはいのちのせいだろうか。

「ならば、一緒にこの人が車を停めた駐車場探してくれよ」

「は…何で私が…」

「いや俺一人では対処仕切れない…って服脱ぐなっってたんだろうお！」

俺は言いかけた所で再び服を脱ぎ出した木山さんに怒鳴りつけた。

「そう言われてもこう暑くてはな…それに君、先ほどから敬語を忘れてるぞ、私は特に構わないが」

俺は頭を抱えてハアと溜息をして

「頼む！美琴、一人だと俺心が折れそうだよ！」

呆れながら見てくる美琴に懇願した。

「何なのよあの人、人前で突然服脱ぎ出して」

俺達は暫く駐車場を探し、今はセブンスミストで休憩を取っていた。

「知らねーよ、ったく…そのうち都市伝説とかにされそうだな」

「あ、そういえば脱ぎ女って都市伝説が確かあったわね」

「…もうすでにあるのかよ」

俺がそう呟いた後、美琴のケータイ（カエル）がケロケロと鳴った。

どうやら黒子達のようなだったが飲み物を買って行った木山さんが戻ってきたため美琴は慌てて電話を切った。

「付き合ってもらおうお礼だ」 そう言って木山さんが美琴に出したのはスープカレー（しかも美琴の反応的にホット）

「ほら君に頼まれた物だ」

俺は事前に頼んでいたため普通の飲み物、美琴が恨めしそうに見てくるが気にしない。

「暑い時には暖かい飲み物の方がいいのだよ、それにカレーのスパイスには疲労回復を促すものが含まれている」

木山さんの説明に苦笑いしながらもスープカレーを一気飲みする美琴、俺はその隣でヤシの実サイダーを飲む。

「…済まないね、研究ばかりしているせいで理論的に考える癖がついてしまっている」

美琴の様子から察したのか申し訳なさそうに木山さんが言った。

「いえいいいんです、所で研究って…学者さん何ですか？」

美琴は気にしないでくださいと手を振って自身の疑問について質問した。

「大脳生理学、主にA I M拡散力場についての研究をしているんだ」

「それって確か能力者が無自覚に周囲に発散している微弱な力の事ですよね？」

木山さんの答えに対して俺が質問する。

「ああ人間の五感では感じ取れず、機械を使わなければ計測もできない弱い力、私はその力を応用する研究をしているんだ」

木山さんの答えに俺と美琴は「へえー」と感嘆の声を出した。そして美琴が少し考えてから

「ということは能力についても多少お詳しいんですね、『どんな能力も効かない能力』なんてあるんでしょうか？」

当麻の事か…と俺はすぐ感づくが口にはしないでおく。

「『どんな能力も効かない能力』…か能力にはいろんな能力があるが…そんなものが本当に存在するならば是非研究させてもらいたいな』遠回しに分からないと言われがっくりと美琴は肩を落とした。

…それにしても…

「さて、そろそろ再開すると…ってユー、何か言った？」

「…ん？、いや何でもない！」

俺は怪訝な顔で聞いてきた美琴に作り笑いで返し、駐車場探しを再開した。

数十分後、何とか木山さんの車を発見し俺達はその場で三人とも別々に別れた。

「…それにしても、あの人どっかで見た事あるんだよな…原作で出たのかな」

俺はそう呟き、家路についた。

後日、美琴から追い回されて疲れきった当麻を見て「ざまあ
W」
と呟いたのは言い思い出であり余談である。
W
W

8話 木山春生（後書き）

ユーは木山先生の事は完全に忘れてます（笑）

8. 5話 主人公設定（前書き）

詳細な（？）主人公設定です。

8. 5話 主人公設定

名前 《深導^{しんどう} 勇^{ゆう}》

通称…ユ一

不幸な事故（猫に氣をとられて階段から落下）により死亡するが、前世での行いの善さから『とある』の世界に転生する。

『とある』の世界にした理由は単なる気まぐれ。

風紀委員に所属しているにも関わらず、よくサボっている。

原作知識はあるもののうろ覚えなので事件の内容を覚えていても詳しい事までは覚えていない。

好きなものは果物（特に柑橘系）、おもしろいもの。
嫌いなものは納豆、面倒なもの。

顔は中の上程度はあるものの普段から寝癖は直さず、けだるそうにしているためパツと見下の上くらい。服は色などにはこだわらず動きやすくフード付きのものを好む。

能力 《武器変換^{ウェポンコンバート}》

『とある』の世界にない武器ならば何でも出現させる事が出来る、ただしこの能力に演算は必要とせず代わりに『体力』『気力』『生命力』等の『力』を媒体として発動している。

なので自身の力量以上の力を無理に発動すると死に至る危険もある。

る。

普段は遊戯王のデュエルモンスター（主にクリボー系統）しか出現させず、システムスキャン身体検査の時も手を抜いてるため『レベル1…召喚士サマナー』という風バンクに書庫には登録されている。

8. 5話 主人公設定（後書き）

いつの間にか一万PV達成しました。読んで下さってる皆さんありがとうございます、そしてこれからもよろしくお願いします。

9話 虚空爆破（前書き）

何だかドンドンスランプになっている気がする…

……え？才能？文才？…何ソレ？オイシイノ？

9話 虚空爆破

「…………次の犠牲者を出さないためにも警備員と協力して一層の警戒強化と事件解決に全力を」

薄暗い部屋の中、事件について説明する女子がそう言って今回の会議は終了した。

「…ふああ」

「不謹慎ですわよ、ユー」

思わず大きな欠伸をした俺に、黒子がジト目で言った。

「…ったってなあ、新しい情報が特にある訳でもないし、薄暗かったから目にも悪いしで凄く退屈だったんだよ」

俺は目を擦りながらぼやいた、そんな俺を見て黒子は呆れる。

「だからって…大事な会議にその態度はあんまりですよ！」

飾利が急に声を荒げるので俺はビクツとなる。

「つても…「言い訳しないでください!!!」…」

あまりの迫力に俺は唖然とする、黒子は驚き半分、諦め半分といった所だ。

「前々から思っていましたけどユーさんには風紀委員のお仕事に対する真剣さが足りません！」

「つて言われても…なりたくてなった訳じゃねえしな」

「なりたくても中々なれない人だって沢山いるんですよ!…私は…ったのに…」

「…何だって?」

「…いいえ、何でもありません!」

そう言って走って行こうとする飾利の腕を掴んで止めるが…

「な、ちょ…待ってって飾利!」

「お仕事に行きますから離してください!…後名前で呼ばないでく

ださい、深導さん！」

そう言って飾利は走り去ってしまった。

「：何時かはこうなると思ってましたが、ここまであの子が怒るとは流石の私でも予想外でしたわ」

一部始終を横で見っていた黒子がそう言って語り出した。

「あの子：前々からユーのお仕事に対する態度には不満を零していましたわ：：それにあの子は一生懸命努力して、頑張って頑張っようやく風紀委員になったんですわ：つまり私の言いたい事、分かりますわよね」

いつになく真剣な顔した黒子が真っ直ぐ俺の目を見て話す。

「：つまり、黒子の推薦で楽に風紀委員になった俺が、風紀委員になったにも関わらず真面目に仕事しないのが気に食わない：って事だろ？」

俺は面前くさそうに話し黒子は首を縦に振った。

「ユーが真面目にお仕事に励めば、あの子の機嫌も直ると思いますよ」

そして、それだけ言って黒子は去って言った。

「：虚空爆破か：確か犯人は眼鏡の男だったな」
グラレトン

俺はうろ覚えの記憶を辿ってみるが、顔すらもうろ覚えである。

「ん？何か言いましたの？」

「：何でも、ただの独り言だよ」

今現在、この第一七七支部にいるのは俺と黒子のみ、飾利は固法
美偉みいという人とパトロールに出かけている：：というか：

「（絶対に避けられてるよなあ）」

今度は心の中で呟く、嫌われるという事は実害は無いが気分が悪い。
い。

「：そんなに気にしてるんなら、真面目に働いて初春に素直に謝れ

「ばいいんではないんですの？」

俺の心中を察したのか作業の手を止めずに黒子が言う、俺はその言葉に少しも考える事なく

「それは無いな」

と言い放ち、支部を出た。

「次の日」

俺はいつものように暇を持て余していると小さな女の子を連れた当麻と出会った、『とうとう幼女にもフラグを立てたか！？』と当麻の人間性を危惧しているとどうやらそんな事はなく、ただ女の子をセブンスミストに連れて行ってやってるようだ。

「なあユー、暇ならお前も一緒に行かねーか？」

と当麻から誘われたので俺も同行する事にした。

そしてセブンスミストに到着した頃、俺はある重要な事に気づく。

セブンスミスト：グラビトン：当麻と幼女………これって最後の

グラビトン事件の現場じゃね！？

「（面倒っちな、まあ動くのは事件が起こってからでいいか）」

俺が欠伸をしながらそう考えていたら、目の前の洋服店でいかにも子供っぽいパジャマに暑い視線を送る美琴がいた。

そして俺と当麻の存在にも気づかず素早くそのパジャマを取って

鏡の前に立ち――

「……何やってんだお前」

俺と当麻にダブルで突っ込まれた。

「……！？……な、何でアンタ等がこんな所にいんのよっ！」

「何でって、俺らは単にその子を洋服店に案内してやってるだけ」
そう言って俺は目をキラキラさせながら洋服を見て回っている幼女を指差す。

幼女は俺達が見ている事に気づくと傍に寄ってきて――

「トキワダイのおねえちゃん！」
美琴に抱き着いた。

「…美琴、妹がいたのか!？」

「…違うわよ!」

どうやら知り合いらしく、昨日この子が無くした鞆を見つけてあげたとかどうか。

「まあそれはさておき、アンタ!（当麻を指差しながら）いつぞやの決着今ここでつけるわよ!」

「ったく、お前の頭ん中はそればっか?というかこんな所で始める気かよ」

呆れ気味に言う当麻に言い返せない美琴、そして幼女に連れられて移動する当麻。

俺?俺はそろそろ爆弾魔でも捜そうかと…

「御坂さーん!」

…思っていると聞き覚えのある声が聞こえ、振り向くとその声の主と頭に花畑を乗せた少女が走ってきた。

「あ、ユー!？」

走ってきた所で涙子が俺に気づいた、同時に飾利も俺に気づいて…
「って深導さん今日は非番じゃないですよね!？」

会ってそうそう核心を突かれた。

「これは…えーと、あれだパトロール!」

まだ怒りが収まってないらしい飾利に対して適当にごまかしてみ

るも：

「絶対に嘘ですよね？」

直ぐさまばれた。

「何？アンタ仕事サボってただけなの？」

横から美琴が口をはさんでくる。

「ほら初春もこんな怒ってる事ですし、早く仕事に行った方がいいですよー」

涙子も飾利に賛同する。

三対一か：

「：はあ、分かったよ、行けばいいんだろ行けば」

俺は三人にそう行って肩を落として歩き出した。

まあ素直に帰る気はないのだが。

「：見つけた！」

カエルのぬいぐるみを持ったヒョロそうな眼鏡の少年を物陰から監視しながら俺は呟いた。

確か爆弾はゲコ太じゃないカエルのぬいぐるみだったからな、しかも眼鏡だし、オーラが爆弾魔だし、多分あいつだろ。

暫くすると少年はぬいぐるみを近くにいた子供：というかさつきまで一緒にいた幼女に手渡し、その場を離れた。

「おう、当麻はどうしたんだ？」

俺は少年がいなくなっただのを確認してから幼女に声をかけた。

「あ、おにいちちゃん！んとねツンツンのおにいちちゃんは向こうにいるよ！」

多分トイレか何かで別れたんだな。

「それでね、これを風紀委員のおねえちゃんに渡して欲しいって眼鏡のおにいちちゃんに言われたの」

そう言ってカエル（爆弾）を持ち上げる少女、俺はそのカエルを少女から取って言う。

「なら俺が渡しといてやるよ、お前は当麻と一緒に楽しんどけ」
そう言って笑う俺に「うん！」と無邪気に答え走り出す少女。

「さて、やることやって外に出るか」

俺はカエルの中に押し込められたスプーンを取り出して呟いた。

「…電気系統のトラブルにより、申し訳ありませんが…」

アナウンスが流れる頃には外に出た俺はキョロキョロと辺りを見渡し…すぐに目的（爆弾魔）を見つけ路地裏に連れこんだ。

「な、何だお前…僕に何か用…!!？」

少年は言いかけた所で言葉をなくした、俺が笑顔でカエルのぬいぐるみを突き付けたからだ。

「な、何を持ってるんだお前は!？」

「何って、ただのカエルのぬいぐるみだけど？」

目の前の少年は必死の形相でぬいぐるみをひったくった。

「なあ、もしかして探し物ってこいつか？」

俺はポケットから一つのスプーンを取り出した。

ちなみに少年の腕はさっきからがっしり掴んでいるので少年は離れたくても離れられない状態にある。

「お、おい！それを早くこっちに渡せ！」

動揺を隠せない少年に俺はニヤニヤしながら聞いた。

「何でこんなもん欲しがるのがさ、爆発するのが怖いからか？」

「あ、当たり前……」

もう遅い、こいつは自ら墓穴をほった。

「へえー、つまりこいつが爆弾って知ってるって事はやっぱお前が爆弾魔なんだな」

「いや…それは、たまたま爆弾魔はアルミを爆弾に変えるって話を聞いたから…」

「じゃあ何でカエル（ぬいぐるみ）の時点であんなに焦ってたんだ？」

「っ……いや、そんな事より早くスプーンを渡せ、後一分で爆発する！」

「ということはお前が爆弾魔なんだな？」

「ああそうだよ！だから早くそいつをよこせ！」

とうとう切れだす爆弾魔、俺はニヤリと笑ってカウントダウンを始めた。

「29…28…27」

「な…何をやってるんだ…？」

青ざめた顔をした爆弾魔が恐る恐る聞いてきたため俺は笑顔で言った。

「ん？カウントダウン♪」

「う…うわあああ！」 叫び声を上げながら逃げ出そうとする爆弾魔、ただし俺がそれを許さない。

「15…14…13」

「くそ、離せ！」

そう言って逆の手で持つスプーンで俺の腕を打ち付けてきた、なので俺はスプーンを制服の胸ポケットに入れて爆弾魔を羽交い締めにした。

「8…7…6」

抵抗が無駄だと分かったのか爆弾魔の全身から力が抜ける。

「4…3…2」

「…やだ、死にたくない！」

すでに涙目の爆弾魔。

「1:~!」

「ドッカーン!!」

俺が爆弾魔の耳元で叫ぶ頃には当の本人はすでに気絶していた。

「…何やってますのユー？」

俺が気絶した爆弾魔の目にスプーンを乗せてウルトラマンセブンをしていたら連絡を受けた黒子が到着した。

「おう？早かったな黒子」

「それはグラビトンの観測地点のすぐそばでしたし、所でその方がそうですの？」

「ああ、爆弾魔」

俺は爆弾魔の指を爆弾魔の顔に当てながら言った。

「……とりあえずこれですぐに警備員が来ますわ」

ケータイをしまいながら黒子が言った。

「それにしても、サボってる振りしてちゃんと風紀委員のお仕事をしましたのね」

「…ん？いや俺は本当にサボってただけだよ」

「…では何故この方が爆弾魔だと？」

屈託のない笑顔で返した俺に呆れながら黒子が聞いた。

「完全に分かってたわけじゃねーよ、ちょっと見かけて怪しかったから鎌をかけた、したらビンゴだった…それだけの事だ」

「…一つ聞いてよろしいでしょうか？」

「…ん？」

「貴方は普段から面倒くさいと言ってますが、では何故今回危険を冒してまで彼を確保しようと思ったのですか？」

「何故って…」

俺は暫く考えてから答えた。

「そりゃあこんなやつを野放しにするのは危ないからだろ、いくら面倒くさいつつたって目の前で事件が起ころうとしてるなら危険なんか省みずに止める…一応仮にも”風紀委員”なんだからな」

俺が答えると満足そうな顔で黒子が後ろを振り返りながら言った。

「ですってよ、初春」

…ん、初春？

「…恥ずかしげもなく臭い台詞を言うんですね、ユーさん」
そう言いながら飾利が姿を現した、状況が掴めない俺に黒子が説明する。

「つまり、先ほどの私の質問は初春の疑問なんですの」

「つまり、俺がどういった心境でこの爆弾魔を確保したのかを飾利は聞きたかったが、面と向かって聞くのは気まずかったから…黒子に頼んだと」

「ええ、まあそんな所ですわ、さて初春？」

黒子に言われ、飾利が俺の方を向いて――

「…ごめんなさい！」

いきなり謝られた。

「さあ次はユーの番ですわよ」

黒子が俺にそう促す。

…えーと、つまり…

「…すいませんでした…？」

とりあえず謝ってみた。

「…私、少し頭に血が上らせ過ぎてました…本当にごめんなさい…」
「いや…まあ、悪いのは俺なんだしさ、俺の方こそ悪かった」
とりあえず黒子のお陰で仲直りはできた…っぽいな。

「じゃあまあ、これからよろしく！って事で」

俺は右手を出して

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

飾利もそう言って俺の手を握った。

「…ちなみに明日からのユーのシフトは私か初春どちらかと一緒に
のでもうお仕事はサボれないですわよ」

和やかな雰囲気をぶち壊す発言をする黒子

「やだな～白井さん、ユーさんはもうお仕事をサボったり何かしま
せんよ！」

そう言う飾利から何だかどす黒いオーラが見える気がする…

「ですよね？…ユーさん！？」

俺はただ「はい」と答えるしかなかった。

その後爆弾魔の身柄は警備員に引き渡し俺達（俺は半強制的に）
はそのまま風紀委員の仕事に励んだ。

「なあユー…この貰ったスプーン、どうすればいいんだ？」

「ん？爆弾にでも変えれば（笑）」

帰ってから当麻とそんな会話をしたという事は余談である。

9話 虚空爆破（後書き）

そろそろ主人公ツエーやりたいけどしたら弱者じゃなくなるから
どうしようか迷ってます。

10話 禁書目録

7月19日、茹だるように暑いこの日が俺の通っているとある高校の終業式だ。

そして今は担任の子供せんせ：小萌先生が夏休みの注意事項について説明をしていた。

「深導ちゃん、何か言ったですかー？」

：小萌先生はなかなか鋭いお方だったりする。

「よし終わったー！」

終了のチャイムと共に俺は背伸びをして立ち上がった。

「さてユー、これからどうする？」

立ち上がるとすぐに当麻が喋りかけてきた、俺は少し考えてから周りを見渡す。

「んー：というかアオピンと土御門は？」

アオピンというのは当麻繋がりで知り合った青髪ピアスの原作キャラ、因みに本名は今だに知らない。

土御門もアオピンと同じで原作キャラ、確か魔術師だった気もするけど今は気にしないでおう。

「二人とも今日は用事だよ」

「そうか、それは残念だ」

当麻の答えにあまり残念そうにせず俺は答えた。

「んじゃまあ、歩きながら考えますかね」

俺の提案に当麻も「そうだな」と了承したためそのまま教室を出て――

「「小萌先生さよならー」」

「はい上条ちゃん、深導ちゃん…また明日」

………

「「え？……えええええ！？」」

小萌先生の言葉に二人同時に同じ反応で驚いた。

「もー！二人共聞いてなかったんですか？明日からの指定者補習」
困ったような顔で小萌先生は続けた。

「このままじゃ二人共留年決定ですよー…特に上条ちゃんは記録術かいはつの単位が！」

記録術かいはつとは、要するに投薬やら催眠暗示やらによって人為的に超能力開発しようぜ！…という学園都市特有の時間割り（カリキュラム）の一つだ。

一応俺も学園都市に来たばかりの頃に怪しげな薬飲まされたりもした、どっかの名探偵みたく身体が小さくはならなかったが…

「…あ、俺今日銀行行かなきゃいけないんだった！悪い当麻、先帰っててくれ」

俺は横で暗い顔をしてうなだれている当麻に言ってその場を後にした。

そして今俺は銀行で金を引き出し、スタコラサッサと帰ってた訳

だが…

「…お腹空いた」

目の前で見覚えのあるシスターさんが行き倒れていた。

で、場所は変わってとあるファミレス。

「…んで、お前は何であんな所で行き倒れてたんだ？」

俺は何の遠慮もなく自らの胃袋に他人の金で出された料理をほうり込む腹ペコシスターさん…もとい禁書目録インデックスさんに尋ねた。

「んー（ゴクン）…魔術師に追われてたの」

「…へえー」

多分俺以外の人物なら信じないだろうが俺は多少なりとも原作知識があるため簡単に信じる。

「むう…信じてないでしょ」

どうやら信じてない風に捉えられたようだ。

「いやいや信じますって、えーと…」

「私の名前は禁書目録インデックスって言うんだよ！」

はい知ってます…何て言えるわけなく俺はインデックスの口周りについている食べカスを常備されている拭き紙で拭き取ってあげてから答える。

「偽名みたいな名前だな、俺は深導 勇…ユーって呼んでくれ！」
とりあえずこちらも自己紹介をした。

「さて、もう食べ終わっただろ、そろそろここを出（ゴンッ！）…ゴン？」

立ち上がりながら言いかけた所で妙な音が聞こえた。

ので音の方を見てみると――

「―だから…ダメ…かな」

…不良達に懇願する涙目の美琴（あれ絶対演技だろ！キャラ的に！）と、テーブルに頭を打ちつける黒子の姿があった。

「…どうしかしたの？」 呆れ気味に美琴達の方を見る俺にインデックスが不思議そうに聞いた。

「…ああ、ちょっと知り合いがな…まあいいや…って当麻!？」

ちよつと目を離れた隙にいつの間にか現れた当麻が不良達と睨みあっていた。

臨戦体制を取る当麻、トイレから続々と出てきた不良、当麻驚愕…そして逃亡、追いかける不良集団、そしてそれを追いかける美琴…

「…関わらない方がいいな」

俺は呟き、ひとまずインデックスと一緒にファミレスを出た。

「さて…とりあえず今からどうすればいいんだ？」

俺は横を歩くインデックスに尋ねた。

正確な日にちは覚えてないが多分インデックスが当麻と会うのはもうすぐのはずだ。

「ん？ 私の事は気にしないでいいんだよ、私は魔術師から逃げてる身だからね、ユーに迷惑はかけられない」

俺の問いにインデックスは笑って答えた、だが何処か無理してる…そんな笑顔だった。

「…そうか、まあ困った事があったら俺を頼ってくれて構わないからさ、曲がりなりにも風紀委員なんてやってるんだしさ」

正直助けなくても助かるんだが、それでも手を差し延べたくなかった。

「…後、迷惑なんて思わねえからな」

「…うん、ユー…ありがとう」

最後に付け足した言葉にインデックスは…今度は本当に心の底からの笑顔を見せ、去って行った。

「…当麻の事も馬鹿にできねえな」

インデックスを見送りながら俺は呟いた。

「（記憶を失って…嘘についてまでも守りたかった笑顔…か）」

俺はこれから起こるであろう出来事を思い出しながら感慨深げに溜息を吐き――

「…さて、いるんだろ？ 魔術師！」

そう言って後ろを振り返った。

10話 禁書目録（後書き）

これは…戦闘フラグ！？

11話 魔術師（前書き）

シリアスをリリースしギャグをアドバンス召喚！

関係ないけどゴヨウが御用されましたね（禁止的な意味で

11話 魔術師

「…いや、君の前にいるんだが…」

振り返った直後、後ろから声が聞こえ、再び前を向き直る。

「…高速移動…だと!？」

「そもそも僕は君の後ろには行っていないんだが…」

目の前の赤い髪で長身、くわえタバコの魔術師が若干引き気味に突っ込む。

「なん…だと!？」

「…そろそろ本題に入っていいかい？」

少し切れ気味の魔術師。

「…すみません、そんな気を使ってもらうと逆に悲しいんですけど…」

「…は？僕は別に気なんか使っちゃ…」

「いやだってお前…めっさカッコつけながら『いるんだろ？魔術師!』何て言って振り向いたら前にいたって…」

「…別に気にしなければいいじゃないか、結果僕（魔術師）はいた訳だし」

羞恥心から落ち込む俺をとうとう魔術師が慰めてきた。

「…だってさ、まず俺はお前（魔術師）がいるなんて予想外だったんだ…誰も見てないから『ちよつとカッコつけてみようかな』とか思ったらこれだもんな」

「…あー、分かった!じゃあこうしよう…僕がもう一度、今度は後ろから現れる、そして君はもう一度同じ台詞を言う、これでいいか!？」

「…!いいのか？」

「ああ…僕は早く本題に入りたいだけだからね」

そして魔術師は後方の闇に消え――

.....

.....

ゴロゴロドッカーン！

.....

「……って何時まで待たせるんだ！？」

十分後怒りながら姿を現した。途中で聞こえた雷はおそらく美琴だろう、雨降ってないし。

「いやさっき『リピートするのも恥ずかしくね？……っていうか今ここにいるのお前と俺だけだし気にする必要なくね？』という結論を脳内会議で出した所」

「という訳で本題というのをどうぞ！」と言う俺に今にも爆発寸前の魔術師はおもむろに一枚の紙を取り出し――

「――巨人に苦痛の贈り物を！」

いきなり魔術を繰り出してきた！

「っ……わっ……と！」

俺は間一髪で出現した炎をかわし……

「危ないな！、死ぬところだったぞ！？」

涙目で叫んだ。

「……っち！」

「舌打ち！？」

魔術師は気を取り直すかのようにタバコをくわえ直し火を付けた。

「んで……結局、本題って何なんだ？」

「……ああそういえばそうだったね」

「忘れてたのかよ…」

「誰のせいだ!!?」

再び気を取り直すかのように溜息を吐いた。

「…まず君がさっき会った少女だが、その少女の事は忘れ「無理」

……」

俺の即答に再び怒りを表にしだす魔術師。

「そんな簡単に忘れられたら色んな事で苦労しないって」

「…まあそこは仕方ないか…ひとまず彼女に関わらなければそれでいい、最後に僕達…魔術師の事は他言無用だよ」

最後の方だけキツと殺意の籠った眼差しを向けて魔術師が言った。

「…他言無用っていうか、インデックスのやつはお構いなしにぶっちゃけてるが?」

「その点は心配いらない、あの子は他人に迷惑をかけまいと人と関わらないようにしてるし…何よりこの町で魔術を信じるのは君くらいさ」

まあ確かに、ここは学園都市…科学が物を言う世界だからな。

「でも俺、一応風紀委員なんだけど?」

「…何!?!」

俺の言葉が以外だったらしく魔術師は驚きの声を上げた。

「まあ普段から仕事はサボって腕章すらつけない不真面目風紀委員だけだな」

「…そうか、なら今回の事を黙っていても問題はないな」

俺の答えに安堵する魔術師。

「まあ君も他言したらどうなるか…分かるだろう?」

そう言って魔術師は懷から一枚の紙を取り出した。

俺は先ほどの炎を思い出しヘラッと笑い

「勿論っすよ、旦那!」

両手を上げて答えた。

「次の日」

「……っ暑い！」

俺はあまりの暑さのお陰でいつもより早く目が覚めた。

「エアコン壊れてんじゃん……テレビも点かないし、冷蔵庫は全滅だし」

「……っつい「不幸だぁー」と隣に住んでる親友の口癖を呟いてしまふ。」

「……当麻の部屋も同じ状況なのか？」

俺は疑問に思ったので当麻の部屋に行ってみる事にした。

……っと言う訳で現在当麻んちの真ん前、部屋隣だからね。
ピンポーンと俺はインターホンを押した。

……っ……

ピンポーン

……っ……

ピンポーン！

……

ピンポン！ピンポン！ピンポン……

「だぁーうるせー！」

「ようやく出て来たか」

俺は怒りながら出て来た当麻に満足したように言った。

「で、何で俺は玄関で通行止め食らってんだ？」

構わず部屋に入ろうとする俺を当麻が素早く遮る。

「…察してくれ」

「だが断る！」

俺は問答無用とばかりに部屋に入り込む

…が、意地でも止めようとする当麻。

「はーなーせー！」

「だー！頼むから暫く待ってくれ！」

「問答…無用！」

そして強引に部屋に入った俺が見たものは――

「……?!…ユ―！」

昨夜の腹ペコシスターさんだった。

「何だユ―、知り合いか？」 俺に続くように部屋に入った当麻が

驚き半分、呆れ半分といった感じに聞いた。

「まあな、昨日行き倒れてたから飯奢ってやった」

「…何だお前昨日も腹空かしてたのか？」

「なっ!?! 何その私は『絶えずお腹を空かしている腹ペコシスターさん』みたいな言い方は!?!」

「…：違うのか？」

「ーッ！」

…ガブリ

「イダダダダ!…って何で俺だけ!?!」

当麻に噛み付くインデックスを見ながら俺は当麻に聞いた。

「なあ当麻？」

「イダダ…何だユ―?…ってかこれ剥がすの手伝って欲しいんですけど」

「はあ…インデックス、そろそろ離してやれよ」 溜息の後にインデックスに言う、不満そうながらもインデックスは当麻から離れた。

「…何でこいつはユ一の言う事を聞くんだ？」

「さあ？…それはそうと…ダー！？」

言いかけた所で、インデックスは今度は俺に噛み付いてきた。

「ユ一も当麻と同じ反応したから同罪なんだよ！」

俺は無理矢理にでもインデックスを剥がそうとするが中々なぜか、離れない。

「おい当麻、これ剥がすの手伝ってくれ！」

「お…おう！」

当麻は直ぐさま俺の頼みに応じ、インデックスの身体を無理矢理にでも剥がそうと修道服に手を掛ける。

この時、俺は二つの事を見落としていた。

一つはインデックスの服は『歩く教会』という魔術の一種だと言う事。

二つ目は原作での彼女の服は当麻の幻想殺しに破壊され、普段は安全ピンで止めていて――

―今現在、安全ピンなど彼女の服にはついていないという事…

キューイン…バラ

「「…あゝ」」

バラバラになる修道服、生まれた時のままの姿で俺にしがみつくインデックスさん、そのインデックスさんを剥がそうとする体制で真っ赤になる当麻、そして今までになく顔を真っ赤にした俺。

そして、一瞬何が起こったのか理解不能だったインデックスさん

は直ぐに状況を理解して……

「ぎゃああああ!!」

「だあー!不幸だあー!!」

絶叫の後涙目で噛み付くインデックスと親友の口癖を真似る俺であつた。

「インデックスさん、どうもすみませんでしたー!」

インデックスに謝る俺達。

肝心のインデックスさんはショックを受けながらも原作通り安全ピンで修道服の補修作業をしている。

……ん?補修?

……

「あ!補習!」

「え…ああー!」

俺の言葉で当麻も思い出したようで大声を上げた。

「インデックス、お前ここに残るなら鍵渡すけどー」

慌ててたせいかそう言いかけた所で当麻は足の指をぶつけ携帯を落とし――

――バキッという音と共に携帯の液晶に亀裂が走った。

「相変わらずだな、当麻の不幸っぷりは」

「不幸だ…」と言って肩を落とす当麻に俺は苦笑いしながら言った。

「君のその右手…」

ふと声が聞こえ、そちらの方を向くと服の修繕を終えたインデックスさんがいた。

「…何ですか？…そのアイアンメイデン」

「日本語では針のムシロだな」

インデックスの服に突っ込みを入れる俺と当麻。

「君達、ちっとも反省してないでしょ！」

「「ごめんなさいでしたー！」」

そして涙目で怒るインデックスに必死に謝る俺と当麻。

「…それでね、君の右手『幻想殺し』何てものが本当だとしたら、それは神様のご加護とか運命の赤い糸とかそういうものもまとめて消してしまってるんだと思うよ？」

「え？…それって…」

「つまり君の右手は、どんどん『幸運』のチカラを消しちゃってるって事」

インデックスの言葉に再び肩を落とす当麻。

「って当麻、そろそろ時間が本格的にヤバイから現実逃避してる場合じゃねえって！」

当麻を直ぐ様現実に戻す俺。

「…じゃあ私はこれで…「おい」」

俺はそのまま行こうとするインデックスを止める。

「もう歩く教会は無くなったんだ、危ないかもしれないから当麻の部屋に隠れてた方がいいんじゃないか？」

「なあ、一つ聞かせてくれ…何でお前の部屋ではなく俺の部屋なんだ？」

「そりゃあだって、当麻の部屋なら何かあっても俺への損失0だし」「うおい！？」

笑顔で言う俺に冷や汗をかきながら突っ込む当麻。

そんな俺達の様子を見てインデックスはクスクスと笑い言った。
「大丈夫だよ、君達の迷惑にはならないから」

またか：俺はそう思い口を開こうとして――

「迷惑何かにはならねーよ！」

当麻が先に口を開いていた。

「だから、お前も俺達に遠慮なんかすんなよ：な！ユー？」

「：当たり前だ！」

俺も当麻の言葉に頷いた。

にしても、こういう美味しい場面を持っていく所は主人公たる由縁なのか、フラグメーカーの素質なのか：

「：君達は、本当にいい人達だね：でもだからこそ頼れないよ」

そう言って彼女は俺と当麻の顔を一度ずつ見た。

「そんな君達だからこそ：地獄には連れていけない、それとも：私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

彼女のその言葉の重みを感じとったのか当麻は口を開かない。

「ま：困った事があったら連絡しろよ、仮にも風紀委員だからな」

俺は一応言葉をかけたがインデックスの質問の返事にはなっていないかった。

「：それじゃあね」

そうしてインデックスは出て行った。

最後掃除ロボに絡まれてたが大丈夫だろう。

11話 魔術師（後書き）

ユーがまともな戦闘するのか（できるのか）不安になってきた。

12話 魔女狩りの王（前書き）

今さらながら不定期更新ですと言ってみる（汗）

12話 魔女狩りの王

インデックスと別れて約八時間が経過した。

補習はだいたい昼くらいに終わり、俺はついさっきまで汗だくになりながら学園都市を走り回っていたりしていた。

「（確かインデックスが切られるのって今日だよな…）」

曖昧な記憶を頼りに禁書の一話を思い出しながら考える。

「…とりあえずできるだけ早く戻ろう」

そう呟いた俺は今…

「へい！特盛お待ち！」

牛丼屋で少し早い夕食を取っていた。

思えば朝から何も食べておらず、これから起きる事を考えると今日はもう食事を取れないかもしれない。

なので俺はこんなにも呑気に牛丼を食べている。

「あ、ユーじゃねえか！」

聞き覚えのある声に振り返る、そこには不幸の名の元に生まれた少年、上条当麻がいた。

「おお、ほふうふあほふあつふあふおふあ？（訳…補習は終わったのか？）」

「ん？ああ、ついさっき終わった所…って特盛かよ…」

当麻は俺の言葉の解読の後に俺の手にあるお椀の中身を見てショックを受ける、言わずとも理由は分かるよ貧乏学生。

そして当麻と一緒に牛丼を食べる。

因みに勿論当麻は並だ。

「そーいやさ、朝の大食いシスター、フードを忘れていたんだ」
唐突にそう切り出す当麻。

今俺達は既に牛丼屋からは出て学生寮へと向かっている。

「ふーん、それじゃあもしかしたらインデックスのやつ部屋の前で待ってるかもな」

現実では血を流して倒れている訳だがな。

「もしかしたら空腹でまた倒れてたりしてな」

軽い口調で当麻が言った。

俺が「そうかもな」と返す頃には寮の真っ正面に着いていた。

そして俺達は他愛ない話を続けながらエレベーターへと向かい乗り込む。

階数表示が3、4と上がっていくにつれて自身の心拍数が上がっていく事に俺は気づいた。

「（思えば生まれてこのかた、命懸けの戦いなんてものは経験した事がないからな…）」

思えば転生前は勿論、この学園都市に来てからも命の危険を感じた事は一度もなかった。「（どうしようかな…とりあえずその場を当麻に任せてインデックスを連れて逃げ出すか？）」

……

うん、それがいいと俺は自問自答してみる。

「（原作では当麻は魔術師に勝ってるんだし）」

結果が出た所で、エレベーターは目的の階に到着した。

ヴィイインという機械的な音が聞こえる。

音のする方へ目を向けると清掃ロボが三台、当麻の部屋の前で動いていた。

「…ってうちの前じゃねーか！、まさかどっかの馬鹿が特大ゲロと

か…!？」

焦ったように当麻が言う。

よく見なくても分かる、あれは倒れているインデックスで――

「……あ…」

安心して近づいた当麻の顔に血が飛びついた、当麻は一瞬絶句した後、

「やっ…やめろ、やめろ!」

血まみれで倒れているインデックスの下へ駆け寄り、俺もそれに続いた。

「くそっ…一体どのどいつにやられたんだ!？」

清掃ロボを退かし、当麻が言った。

「うん？ 僕達『魔術師』だけど」

当麻の問いに答える声が後方から聞こえ、俺と当麻は振り返った。

声の主、俺が昨日会った赤髪の魔術師は、昨日とは別人と思えるほどの殺気を放ちながら現れる。

「わざわざアミにかかりに戻ってくるとはね、忘れ物でもしたのかね」

魔術師の言葉に俺も当麻もすぐに検討がついた。

「…ミスったね、あのフードにも一応触れておくべきだったな」

俺は横で固まっている当麻にそう告げた。

肝心の当麻は苦虫を噛み潰したような表情を作る。

「にしても、随分と派手にやったね、神裂が斬ったって話は聞いた

けど…」

目の前の魔術師はタバコをくわえながらインデックスを見た。

「死にかけだろうと回収はするけどね、ソレの持つ十万三千冊の魔道書は」

「…っ…回収だと!?!」

魔術師の言葉に当麻が反応する、魔術師は「そう、回収だよ回収」と馬鹿にしたように言った。

「大体こいつがどこに魔道書なんか持ってるんだよ!?!」

当麻が恐らくずつと疑問に思っていたであろう事を口にする。

「多分、頭の中…だろ?」

俺は魔術師に確認するように聞いた。

「察しがいいね、『完全記憶能力』…彼女はどんなものでも一度見たものは忘れない…忘れる事ができないんだ」

最後の方だけ、忌ま忌ましそうに魔術師が言った。

「だから、インデックスを回収すると? 狙いはインデックスの頭の中の魔道書か?」

俺の問い掛けに魔術師は「半分正解だ」と答える。

「そいつは使える連中の手に渡ると少々厄介な代物なんだ、だからこうして僕達が回収…いや保護しに来たということさ」

「保護…ねえ」

魔術師の言葉に俺は「とりあえず」と言って続けた。

「まずはインデックスの怪我を治す方が先だろ」

俺はインデックスを見下ろしながら言った。

「ああそれは僕達がやるから心配はいらない」

魔術師が当然だと言うように言って、

「ふざけるな! インデックスをこんな目に逢わせたやつらの事なんか信用できるか!」

当麻が噛み付くように言った。

「そうか、まあ君の意見も分からなくもないな、聞く気もないが」
敵意剥き出しの目で魔術師が言った。

「当麻、頼みがある」

「なんだユー？」

「インデックスの十万三千冊の中にはきつと回復魔術的なものもあるはずだ、俺がそれを使ってインデックスを治すから、当麻は魔術師^{あいつ}を頼む」

当麻が「分かった」と返事をする、魔術師は何がおかしいのか「クックック」と笑い始めた。

いや、おかしい点は俺でも分かっている、それは：

「水を差すようで悪いけど、君達能力者は魔術が使えない：いや、使えない事はないが使うと何かしら^{リバウンド}の反動があるよ」

そうそれだ、確か能力者と魔術師では回路が違うとかどうか。

「だったら能力者以外なら使えるんだな？」

魔術師から否定の返事は返って来なかった、当然と言えば当然か。そして、こんな状況で頼れる人物というのは俺には一人くらいしかいない。

「当麻、とりあえず俺は小萌先生のうちに行くぞ」

原作でインデックスを治したのも確か小萌先生だったはずだ。

俺の提案を当麻は「分かった」と了承した。

「よし！」

そう言って俺はインデックスを連れていくため傍に寄ろうとした。

「：それでこの僕、ステイルⅡマグヌスがそう安々と標的を逃がすと思うかい？」

魔術師、ステイルの声に俺は足を止めた。

そして俺と当麻の緊張は一気にピークに達し――

「Fortis931：僕達魔術師は魔術を使う時は真名ではなく魔法名を名乗るんだけど、その魔法名には別の意味もあるんだ、それは：」

ステイルは喋りながらくわえていたタバコを落とした。

：とたんにタバコについていた小さな火は巨大な炎となった。

そしてステイルはそれを操り、

「殺し名、かな？」

そう言って以前聞いた事のある台詞と共に炎をこちらへと飛ばしてきた。

「ッ、当麻！」

俺が叫ぶのと同時、否それよりも早く当麻は動いていた。

「うおおおおお！」

当麻は素早く俺達の前に立ち塞がり、迫り来る炎に己の右手を向けた。

sideステイル

壁は黒く焼け焦げ、目の前の空間には煙りが立ち込めていた。

「やり過ぎたか？——まあいい夏休みとやらで住民は居ないようだしね」

摂氏三千度の炎をモロに食らったんだ、仮に生きていたとしても無事では済まない。

ステイルは自身の守るべき対象を確認する。怪我が酷いが自身の炎では傷をつけてなどいない、勿論自分にあの子を傷つける気など毛頭ないが。

まあ何にしても——

「ご苦労様、真っ正面から向かってきた蛮勇^{ゆうぎ}だけは認めてあげるよ」
歩を進めながらステイルは口を開いた。

「…だーれがご苦勞様、だって？」
そして、その声に応えるように、先ほど燃やしたはずの少年の声が聞こえた。

side out

「そうだ、インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだってその右手なんだ」

俺は、敵の魔術師の炎を消し去り、段々と自信に満ちた表情に変わって行く親友に向けて言った。

「炎だろうが何だろうが、所詮はただの『異能の力』だー！」
「な…」

予定外、そして意味不明の当麻の能力にステイルの頬を汗がった。
う。

そして、ステイルが固まったのは一瞬だった。

「チィ！」

舌打ちをしながらステイルは次の攻撃に移った。

素早く炎剣を作り、再び当麻に向けて振り下ろす――

――そして、硝子を割るかの如く、当麻の右手はステイルの炎剣を粉々にした。

「…そうか、ずっと気になっていたが彼女の『歩く教会』を破壊したのは…」

ステイルが睨むように当麻を見た、肝心の当麻は既に勝利を確信している。

「当麻！俺はインデックスを連れて——」

俺は言いかけ、やめた。

魔術師ステイルが恐らく次の手に移ったからだ。

「その名は炎、その役は剣」

ステイルの後ろに赤黒い炎が渦巻き始め、次第にそれは形となっていく、

「——我が身を喰らいて力と為せ——ッ！」

真っ赤に燃える炎の中心で黒い人型のモノが現れた。

「魔女狩りの王、その意味は必ず殺す！」
イノケンティウス

ステイルの「殺れ」という一言で魔女狩りの王は動き当麻に襲い掛かった。

「邪魔だ！」

そう言って再び幻想殺しで対処する当麻、右手に触れた『異能力』
イノケンティウスは形を失い、そして、

「何!？」

再び形を取り戻して当麻に襲い掛かる。

右手で防ぐ当麻、しかし消滅した直後に直ぐさま復活する魔女狩

りの王に次第に押され始めた。

「…仕方ねえかな」

——本気を出すのは正直嫌だ、めんどくさいし、バトルとか痛いし

…だけど

今日の前でピンチに陥ってるのは親友で、後ろにいるのは血を流して今にも死にかけている少女だ。

ならば、俺がとるべき行動は一つ——

「う…ぐ、あちっ…熱ちちち！」

当麻はとうとう抑えきれなくなって右手をつい逸らしてしまった。そして、そのまま魔女狩りの王は当麻への攻撃を続行して——

アドバンスドサモン
「上級召喚！」

魔女狩りの王が吹き飛んだ。

「な…!?!」

「…え!?!」

別々の反応で驚くステイルと当麻、二人の視線は俺の前に佇む一体の黒魔術師に釘づけになった。

「上級召喚、ブラック・マジシャン!」

吹き飛ばした魔女狩りの王が再び再生した、こちらも臨戦体制をとる。

「…さて」

思えばさっきまで感じていた圧力が消えていた、不思議と今は、ピンチの当麻と死にかけのインデックスを救う事以外に頭が働かない。

「第二ラウンド、始めますか?」

俺はニヤリと笑って呟いた。

13話 黒魔術師（ブラック・マジシャン）vs 魔女狩りの王（イノケンティウ

初めての戦闘シーン、上手く書けてない自信ならある（涙）
しかも13話まで来てようやくまともな戦闘って…

13話 黒魔術師（ブラック・マジシャン）vs 魔女狩りの王（イノケンティウ

sideステイル

何だこれは――？

イギリス聖教「必要悪の教会」ネセサリウスの魔術師、ステイルⅡマグヌスは第一に素直な疑問を持った。

目の前にいる少年は学園都市に五万という低能力者（レベル1）のほずだ…

…：はずなのだが…

現に目の前にいる低能力者は魔女狩りの王を吹き飛ばした、そして更に驚くべき事は――

「馬鹿な…魔術だと!？」

そう、彼の呼び出したそれは魔力を使い魔女狩りの王を吹き飛ばしたのだ、魔力は感じるものの、見た事も聞いた事もない術式だった。

「…一つ、聞いていいかい？」

できるだけ平静を保ちつつステイルは問いた。

「君の能力は確か召喚士…だったね、まさかと思うけど、魔術師それも君の能力なのかい？」

「ああ、そうだよ」

少年、深導 勇は当然と言う風に答える。

「…能力者がその能力の端くれと言えど魔術を使うだど!?!?」
そんな話は聞いた事がない、

それに事前に聞いていた情報よりも能力の強さが明らかに違う。

「…当麻、インデックスを小萌先生のそこへ連れて行ってくれ!」
少年が別の少年に向かい叫んだ。

「っな…ふざけんな!、お前一人でどうにかなる相手か!?!?」
言われた方が反論するが、言った方は聞く耳を持っていないようだ。

彼の操る魔術師が僕と魔女狩りの王の方へ杖を向ける。

「今はインデックスの治療が最優先だろうが、いいからさっさと行
けえ!」

少年がそう叫んだ直後、魔術師が動いた。

s i d e o u t

「っ…必ず戻ってくるからな、死ぬんじゃねえぞ!」

当麻はそう言ってインデックスを抱えて走り出した、
全く…誰にモノを言ってるんだか…

走る当麻を追いかけようと魔女狩りの王が動く。

「…悪いが、こっから先は通行止めだ!」

そして俺の召喚した魔術師、ブラック・マジシャンがその前に立
ち塞がる。

「君のその能力について色々聞きたい所だけど、まずは禁書目録の回収が最優先だ。」

ステイルが言った、疑問は晴れないものの今は目の前の事態に対処しようという事か。

「ブラック・マジシャン！」

叫び声と共にブラック・マジシャンがステイルに向かって突進していく。

「魔女狩りの王！」

ステイルも魔女狩りの王でそれに対抗した。

ブラック・マジシャンに覆いかぶさるように魔女狩りの王が体全体を使い攻撃してくる。

ブラック・マジシャンは飛びのいてそれを間一髪で躲す、

しかしそこで魔女狩りの王は拳を握りしめてパンチを繰り出してきた。

「さすがにこれは避けられないか……トラップオープン魔発動！マジカルシルクハット！」

拳が当たる直前で四つのシルクハットが出現した、そのうち一つに攻撃が当たるが、中は空っぽだ。

「ツチ、また妙な術を！」

ステイルが舌打ちする、術と言う事はこれも魔術に見えるのだろうか？

「マジックオープン サウザウンド魔法発動！千本ナイフ！」

シルクハットの一つからいくつものナイフが飛び出して魔女狩りの王に突き刺る、溶けない所を見るとただのナイフじゃなさそうだな（ぱっと見分からないが……）。

「まだまだあ！、死のマジック・ボックス！」

次は魔女狩りの王とブラック・マジシャンが突然出現した箱の中に入り、

魔女狩りの王が入った箱からブラック・マジシャンが出て、逆からは更にナイフが突き刺さった魔女狩りの王が出てきた。

「っな…」

ステイルが絶句する、さっきまで目の前にいたイノケンティヴス・マジシャン味方が敵に変われば流石に驚くか。

「じゃあこれで終幕だ！」
フィニッシュ

俺の言葉にハッとするステイル、直ぐさま次の術式を使おうとするが…

「遅い！、黒・魔・導！」
ブラック・マジック

次の瞬間、ブラック・マジシャンの杖から放たれた魔弾がステイルを直撃した！

そして、ステイルはそのまま崩れ落ち、魔女狩りの王も消え去る。

「…勝った、のか？」

それから数秒後、俺は口を開いた。

「とりあえず…もういいかな」

そしてそう呟いてブラック・マジシャンを見る、ブラック・マジシャンはコクンと一度頷くとそのまま霧のように消えた。

「…っだあああ！疲れた！」

俺は額から流れる汗を腕で拭った、今回は上級モンスターだけで

なく、魔法や罨もいくつか使ったためかなり体力やら何やらを消費した。

実は毎日やってる訓練や能力慣れがなければ、また前回みたいに倒れていたかもしれない。

因みに特訓に関しては家の中で常時クリボーやハネクリボーを召喚させたり、誰もいない場所で適当に何かを召喚させていたりする。

「…っと、とりあえずステイルをどうにかしないと……って」

そう言ってステイルが倒れている場所に目を向けた。

「…誰あんた？」

そこにいたのは気を失ったステイルを抱き抱えた一人の女性、片足だけ丸々切った感じのジーンズに腰から日本刀らしき物をぶら下げた整った顔立ちの女性だ、

確か原作にいたような気がしないでもないが覚えてない。

「かんざきかおり神裂火織と申します。」

神裂は俺の問いに律儀に答えてきた、にしても神裂に抱かれるステイルが凄く格好悪く見えるのは俺だけだろうか？、何たってお姫様抱っこだからな…

「…んで、戦るの？」

俺は緩みきった気を引き締めて質問する、正直力を使い尽くして勝ち目はないが。

「いえ、今日はステイルもいますし退くとします」

ここで俺の中かなりの安堵感が生まれた訳だが、それを顔に出す訳にはいかない。

「私達は近いうちにまた現れます、その時は必ず彼女を保護します

のでそのつもりで」

そう言うと神裂はスタイルを連れて去っていった。

俺はしばらく呆然とその場に棒立ちして、

「っと、面倒事になる前に俺も退散するとしますか!」

さっきのバトルで風紀委員やら警備員やらが集まってきた、
ので俺はこっそりとその場を後に――

「それで、どこに行くつもりなんですの?」

――何てできなかった、マンションから出て「さて小萌先生の家
へ行こうかな:あれ?小萌先生の家ってどこだっけ」何てやってる
所で風紀委員の同僚、白井黒子がやってきて↑今ここである。

「どこって:ここ俺も住んでるマンションでこの通り今夜はここに
居られそうにないじゃん?、だから寢床でも探しに:」

「なら何であんなにコソコソしてたんですの?」

俺は核心を突かれてギクツとなった。

「やはりお仕事をサボるつもりでしたのね」

怒ったように黒子が言った、どうやら俺がマンションから出てき
た所は見えていないようだ、

見ていたのなら騒ぎの原因を真っ先に聞いてくるはずだから。

「それにしても一体どこの能力者の仕業なのでしょう:見た感じは
発火能力者の仕業みたいですけど」

考えながら黒子が呟いた、

「魔術師の仕業だよ」：何て口が裂けても言えるはずがない。

どうやら事は能力者同士の喧嘩として見られているようだ。

さてどうやって黒子^{くろこ}から逃げ出すか：

そんな事を考えていると誰かが走る音と声が聞こえた。

「ユー！魔術師は怎么样了んだ！？」

声と足音の正体は当麻で早速単刀直入に聞いてきた、黒子が魔術師という単語に「？」マークを出している。

「あー、ゲームの話だよ：何とか倒した、それよりインデックスはどうなった？」

黒子は俺の言い訳にまず納得し、次に呆れる。

当麻は俺の『倒した』という言葉に一瞬驚いた様だが直ぐに状況を説明してくれた、インデックスは小萌先生に任せて直ぐに戻ってきたらしい。「そうか、これ以上ここに居ても時間の無駄だな」

とりあえず小萌先生の家の近くまで行くか。

「それもそうですね、まだ幻想御手の件も片付いてないですし」
「どうやら黒子も納得したようだ、

とりあえずは俺と当麻はその場を後にした。

去り際に黒子がたまには自分から支部に来るように言っていたがスルーした。

小萌先生宅の前に着いた直後に俺の携帯が鳴った。

当麻によると当麻の携帯は朝昇天したため連絡は俺の携帯にするようにしていたらしい。

俺は携帯の通話ボタンを押して「もしもし」と対応する。

「深導ちゃん！？」

突然の叫び声に思わずピッと電話を切ってしまった、
が、数秒後直ぐにまた電話がかかってくる。

「どうしていきなり切ったりするんですか!？」

「いえつい、それより当麻が連れてきた子はどうなりました!？」

「そうです! 一体何なんですかあの子は?、あの子の指示通りにしたら傷は治りましたが: 詳しく先生に説明して欲しいです」

そこで俺は電話を切った、再度着信音が鳴るが無視。

「つーわけでインデックスは無事なようだな」

電話の内容を横で聞いていた当麻は安心したようにため息を吐く。

「じゃあ俺は今日は支部の方に泊まるから」

俺はそう言ってその場を後にする、当麻も了承し小萌先生の部屋へ向かった。

多分色々質問されるだろうから、面倒事は全て当麻に押し付けるでしょう、

当麻もその事には気づいてないし。

さて、今日は一旦支部に戻って明日朝早くに銭湯にでも向かうかな。
な。

: ってかこの勢いなら補習サボっても無問題モーマンタイだよな?

俺は明日の予定を立てながら、その夜はそのまま家路(?)に付いた。

13話 黒魔術師（ブラック・マジシャン）vs 魔女狩りの王（イノケンティウ

マジックオープン トラップオープン サモン
魔法発動、罫発動は召喚のような掛け声的な物が欲しくて加え
ました。

弱者から遠ざかっていく…

書庫にはレベル1と登録されてるし問題無し…か？

ちなみにこの日の午後（主人公が謎に走り回っていた事）は外伝
でやります、

遊戯王のとあるキャラ（？）がメインなので分からない人が読ま
なくてもいいようにあまり本編では突っ込みませんでした。

14話 偏光能力（前書き）

何か少し間が空いてしまった……何故だ！？

……とりあえず友達から貰った漫画やラノベでも読もうか（↑原

因）

14話 偏光能力

寝心地の悪いソファの上で目が覚める。

昨日のステイルとの戦闘後、当麻はインデックスのいる小萌先生宅へ、俺は風紀委員の支部に泊まっていた。

「8時40分…まだ早いかな」

俺は時計を見て呟いた、

寝にくいソファの上だった事もあり睡眠時間は約五時間くらい、俺は普段七時間以上は必ず寝てるため全然寝足りない。

「という訳でお休み」

俺は誰に言うでもなく呟き、

「……で、どういう訳でお休みなんですか？」

予想外の返答の後、俺は黒子に叩き起こされた。

「随分とお早い出勤ですね黒子さん」

「ええ、昨夜は言いませんでしたけど幻想御手について進展があったんですの」

不服そうに呟く俺と気にしてない様子の黒子。

というかまだ解決してなかったんだな…

因みに、幻想御手の事は原作知識で知っていたし何度か黒子から聞かされていたため知っている。

「もうすぐ初春も来ると思うので話はそれからですわね」

という訳で五分後くらいに飾利が到着した。
そして幻想御手をダウンロードして今後の対策を練る。

「…ってダウンロード数五千件以上って…」

飾利が言うには業者に連絡してサイトを閉鎖するまでの幻想御手
ダウンロード数は五千件を超えているらしい。

しかもダウンロードできなくなってから金銭売買が増えている
とか。

「広まるのを完全に止める事は無理…か」

黒子が苦悩の表情で呟く、俺は内心（解決するのは知ってるから）
かなり呑気だ。

ってか今だに犯人を思い出せない…誰だったかな…

「その取引場所は分かりますの？」

考え事をしているといつの間にか話が進んでる、どうやら数多い
取引場所を一つ一つ回っていくらしい、

面倒くさくないのだろうか？

「他人事のような顔してますけど、もちろんユーも行くんですよ？」

突如飾利から声をかけられる…って、はい？

「当たり前ですよ、初春は木山先生の見解の方をお願いしますの、
私一人でも事足りますが一応念のためにユーにもついて来てもらい
ますわ」

何か黒子も了承してるし。

「いや、でもほら…」はいはい、さっさと行きますわよ」…はーな
ーせー」

そして、引きずられる形で俺は支部を出た。

………

………

「こちらスネーク、敵（黒子）を振り切り無事銭湯への侵入に成功」
俺は壁に張り付き石鹼を持った左手を口に近づけて呟いた。

黒子と共に支部を出て一時間が経過していた。

ついさっきようやく黒子からの逃亡に成功し、とりあえず汗を流
すために銭湯に入った。

ちなみに周りには誰もいないからな？俺は危ない人じゃないから
な？

んで、何事もなく銭湯を出る。

違うからな？決してスネークのあれがやりたかったとかそういう
のじゃないからな！？

「…っと、今からどうするか」

とりあえずインデックスの事が気になるし小萌先生の所にでも…
「でも補習の事とか突っ込まれたら嫌だな、当麻から何の連絡もな
いって事は連絡するような大事がないって事だし…」

………

……ん？

周りに人はいないよな？何か声が聞こえるような…
俺は声を頼りに近くにあるボロボロのビルに近づく。

「ちょうどこの辺り…って」

気になって覗いてみると、涙子？何やってんだ？

「もっ…もうやめなさいよ！」

涙子は顔を下に向けて相手に恐怖しながらもはつきりと言う。

相手はいかにも自分ら不良やってますよ的なやつ三人。

見た所、その場にいるのは涙子と不良三人とボロボロの小太りの男。

おそらく涙子はあの小太りの男を助けようとしているんだろう……

「けっこう勇気あるんだな、あいつ」

俺が涙子の行動に感心しているとリーダー風なやつが涙子に近づく…

ガァンッ！

という音が鳴り響く、男が涙子のすぐ隣に蹴りを入れたのだ。

そして男は涙子の髪を掴んだ。

「ツチ、まずいな」

一言そう呟き俺は動こうとして…

「貰い物の力を自分の実力と勘違いしているあなた方に、彼女を笑う資格はありませんわ！」

そう言って現れるは我等が風紀委員の鏡、白井黒子。
：俺がいなくなった後も一人で頑張ってたのね…

俺が変な罪悪感に捕われている間に、黒子はあっという間に一人片付けてしまう。

次は狐目の男が鉄柱を操り黒子の方へ飛ばす。
：けど…

「無駄なのになあ」
俺の呟きと同時に、黒子はレポートで一気に男の前まで飛び、流れるような動きで手に持った鞆を男の顔面に勢いよく減り込ませた。

「これで後一人、もう終わりかな」
とりあえず黒子に見つかってて訳じゃないしな、この場は退散するとして後々どうするかだな、何か正當な言い訳を考えてないと飾利と黒子から肉体的にも社会的にも殺される（比喻表現無しで）。

そんな風に俺が頭をフル回転させて今後の行動を考えてる時、突然の大きな音に俺は黒子達の方を見た。

どうやらさっきの音は男の蹴りを黒子が鞆で防御した時の音だったようだ、
鞆に凹みが出来てる、買い直しだなありゃあ…

「……って、黒子押されてんのか!？」

黒子の顔にはいつもの余裕がない、本気でやばいんだな。

黒子の攻撃が何故か男に当たらない、多分あれがあいつの能力何だろうけど…あんなやつ原作にいたっけ？

「しかもナイフまで使うし、危ないやつだな…」

さて助けないといけないかなこれは。

黒子も大分ボロボロになってるし、ギャラリーが多いのがネックだけ。

そして俺が出て行こうとした時、

黒子が男に蹴り飛ばされてビルの中に入った、…っていうか硝子危ねえ。

男は黒子を追ってビルの中へ入っていく。

「カッカカ、次は鬼ゴツコか…いいぜえー十秒だけ待ってやる」
ビルの中から男の声が聞こえる、随分と余裕ですねえ…

…14…12…

…8…

…2…

…

「ゼロ!」

余裕を持って十五秒、俺はそれから十五秒後姿を現した。

「!?!? ユー?」

驚いたように涙子が言う、いや実際に驚いてるのか。

「さて、後は俺達風紀委員に任せて逃げてくれ、ついでに警備員への連絡もお願い（めんどいから）」

「…あ!…白井さんが!」

切羽詰まったように言葉を口にする涙子、近くにいる小太りの男は何が何だか分からないようだ。

「ああ分かってる、俺は黒子の援護に行くから」

「…あの、私に何かできる事は…?」

本当凄いな、俺だったらこんな場面に出くわしたらスルー決定なのに。

…まあ今回は友人がいるから関わったけど。

「できる事は安全な所に逃げる事…あ、警備員呼んでくれ、それがあつた!」

俺の言葉に少し肩を落とす涙子、そんなに警備員呼びたくないのか?

「じゃあお前らは早く逃げてろ、俺はもう行くから」

俺の言葉にまず小太りの男が反応し逃げる、涙子も走り出すが何だか元気がなさそうだ。

…:…まあ今はまず…:

「切り替えは得意だから態度には出さなかったけど…:…」

黒子と涙子に手を出した分…:

…:十寝不足のイライラの分…:

「きっちり払ってもらいますか!」

誰にも聞き取れないような小さな声でそう呟き、俺はビルの中へ

入っていった。

「……で、どう料理してやるか」 相手がどんな能力だったかなんて俺は覚えていない。

確か黒子が自身の攻撃が当たらず困惑してたな：

「……でも黒子は攻撃を受けてた」

……となると、視覚に何らかの変化を起こす能力か？

「……まあいいか、見えてないだけなら」

……楽勝だな。

そして、とりあえず俺は上に上がるようにビルを進んでいた。確か黒子達は最終的に最上階まで来たはずだ、ならわざわざ探さなくても最上階で待ってれば来るって訳だ。勿論、勝つための仕込みをとうの昔に終わらせて――。

side 黒子

逃げるように走りながら、

黒子はビルの中を走っていた。「（確証はないけれど……敵の能力についての大方の予想できましたの）」

だが予想は出来ても直ぐには対処できない、その歯痒さから黒子は奥歯を噛み締める。

今現在自分がいるのは四階、
そしてこのビルは五階建て……

「よオ、一体何時まで逃げ回れば気が済むんだあ？」

「…ッ！」

不意に声が聞こえ、次に男の蹴りが黒子の右足に当たる。

「…っく！」

痛みに顔をしかめながらも黒子は敵対する男を見据えた。

「いくら逃げても変わらねえよ…お前じゃ俺に勝てない」

余裕の表情で男が言った、

…直後、黒子は上の階、最上階へと飛ぶ。

「…はあ…はあ」 体が痛みを訴える、息も切れ気味、

体も服もすでにボロボロである。

「…分かりましたわ」

黒子は呟き、窓際まで移動する。

敵の能力の大方の予想はできた、ビルの柱の位置も理解した。

「後は…この窓ガラスを、柱に直接レポートさせるだけ…」

…コッソリ コッソリ

敵を倒す算段を立てた直後、足音が聞こえてきた。

「…来ましたわね…」

コッソ コッソ！

そして足音は確実に大きくなっていき――

「…お、黒子」

現れた人物に黒子は思わず肩をガクッと落とした。

S i d e o u t

「お、黒子」

最上階に着き、歩いていると黒子を発見、

だが黒子は何故か緊張の糸が切れたように肩を落としている。

「……一体あなたはこんな所で何やってるんですの？」

疲れたように黒子が言った。

何してるって言われても…

「何かピンチぽかったからな、加勢に来た」

俺は言いながら辺りを見渡す。

……どうやらまだ敵は来てないみたいだな。

「あ、ちなみに涙子達はもう逃がした後だからそこは心配ないぜ？」
まだ肩を落としてる黒子に言う。

「……まあいいですわ、それよりユーも早くこの場を離れてくださいまし」

「…え？何で？」

「何でって…危険だからに決まっていますの！」

焦りながら言う黒子に俺はニヤリと笑い言う。

「何だ？心配してくれてんのか？」

「そ、そういう訳では……」

……コツン コツン

黒子が言いかけた所で足音が聞こえてきた、十中八九あの不良の足音だろう。

「……心配してくれんのは嬉しいけどよ……」

コツン コツン

「その心配は…」

…コツン、コツン！

「…ああ？一人増えたか？」

「あっちに向けてあげた方がいいと思うよ？」

そして男が現れ、俺は振り返りながらニヤリと笑った。

14話 偏光能力（後書き）

作中では名前が出なかったのでサブタイにしてみました。

後地味に直しの作業やってます（とりあえず今三話までやりました）。

15話 毛玉と増殖と一p:

俺は再度黒子の状態を確認する。

虚勢を張っているが汗の量が凄い、無事……には程遠い姿だ。

「カッカッカ、てめえもその女みてえにボロ雑巾にしてやるよ」

男の挑発が聞こえる、俺はゆっくりと男の方へ手をかざした。

「さてさて、ボロ雑巾になるのはホントに俺かな？」

「ああ？……てめえ、何言ってやがんだ？俺に勝てると思ってるのか？」

そう言っただけで男がこちらに歩み寄って来た、まあどうせ光の屈折を利用した虚像なんだろうけど。

「そうですよ！ここは私に任せてユーは……ムグッ！？」

うるさかったので空いてる方の手で黒子の口を塞いだ。

「絶対に負けはないから大丈夫だよ、ってか黒子は俺の実力知ってるっしょ」

「…それはそうですけど、こんな所であの竜を呼び出すつもりなんですよ！？」

俺が言い終わると同時に黒子が俺の手を跳ね退けて口を開く。

あの竜……とはレッドアイズの事だな

俺は首を横に振って答える。

「いいや、ってか別に上級モンスター呼ばなくてもあの程度の雑魚

には勝てる」

「……言ってくれるじゃねえか……」

”雑魚”の単語に男が反応し、懷からナイフを取り出してきた。そして、男は俺との間合いを一気に詰めてきた。

後ろには壁、そして隣には怪我人がいるため逃げる事はできない。それを分かった上での男の突進、しかも能力のお陰でカウンター
の心配もない

男は俺の目の前まで来るとナイフを振り上げ勢いよく下ろした。

「……まだまだだね！ハネクリボー！」

だがそれは目の前に現れたハネクリボーのバリアに弾かれる、男は驚き一歩後ろに下がった。

「カッカッカ、おもしれえ能力だな」

男がハネクリボーを見ながら呟く、そして男は「だが……」と続ける。

「それだけじゃあ勝てないぜい？」

言葉の後に男の姿が揺れた、俺はゆっくりと口を開く。

「偏光能力……ねえ」

「カッカッカ、気づいてやがったか」

「まあな、黒子も当然気づいてただろ？」

当然話を振られたからか「……え？ええ勿論ですの」と若干戸惑い
気味に答える。

というかいい感じに空気だな……黒子エ……

「……今何か失礼な事考えませんでした？」

見透かされた！ヤバイ！ギャグってきた、シリアスに戻さないと

……

「で、そのチンケな能力で一体どうするつもりだ？」
空気読んだ！男が空気読んだ！もう台なしだけど。

「そうだな、ヒントをやるとしたら……」

とりあえず頭の中を切り替えて目の前の男を睨む、男の姿が能力で揺れる、黒子は何時でも戦えるよう構えている。

「塵も積もれば山となる”だな！」

俺が言葉を放った瞬間、廊下から大量の茶色い毛玉……遊戯王でお馴染みのクリボーが流れ混んできた。

「っなんだこりゃ!？」

男が自分の周りに集まって来るクリボーを振り払いながら叫んだ。
黒子は黒子で空いた口が塞がらないようだ。

俺は不敵に笑いながら両者に説明する。

「ふん、偏光能力って事は見えないだけで実際にはそこに居るんだろ?……だったら簡単じゃねえか、見えなくても場所さえ分かればどうとでもなる！」

そうこれが俺のやった仕込みだ。

内容は単純にクリボーを増やしてただけ!、よく遊戯がクリボーを増殖してた様に時間の限りクリボーを増やして、増やして…増やしまくっていた。

「まあ最も、ここまでの増殖は想定外だったがな……」

どうやら大分能力の扱いが上手くなる+馴染んできたらしい、ま

だまだ余裕がある。

「っち、めんどくせえ！」

男がそう呟きこちらに突っ込んでくる、恐らく今現在能力を使っているんだろうが、

……残念だったな

「……クリ！」

一匹のクリボーが反応する。

直後、無数のクリボーがそのクリボー目掛けて突進していく。

「能力なんて無意味だぜ？ お前の能力は光を曲げたりなんやかんやして虚像を見せる事だろ」

アバウト？ 気にするなし。

「実際には俺に本物のお前は見えちゃいねえ……だが、そこらにいる毛玉は違うだろ？」

部屋には無数のクリボー、クリボー、クリボー……。

こいつら全員に能力を使用する何て芸当は恐らくこいつ程度じゃ無理だろう。

……まあできて問題ないか、クリボーは外にも既に配置済みだ。

「……だったら！」

今までいた男が消えて、別の所に姿を現す。

「能力なんか関係なしにやりやあいだけじゃねえか！」

そう言って男が向かって来た、俺は直ぐさまクリボーを動かし男の邪魔をする。

「……とりあえずその危ない物は仕舞おうぜ？」

隣でダーツを構える黒子に俺は言った。

「確かにユーのお陰で相手の能力は封じれましたわ、ですがあれで

は確保出来ませんわ」

言い放つように言う黒子、そんな黒子に俺は「確かにな」と肯定する。

「そろそろ攻撃に入らなきゃな」
バトルフェイス

黒子の頭の上に？マークが出たが気にしない。

「機雷化ア！」

……

……

そして何も起こらない。
ように見えた。

「一体何なんd……」

男が言いかけながら目の前のクリボーを振り払おうと手を伸ばし、その手がクリボーに触れた瞬間、ボンッ！という音と共に小さな爆発が起こった。

「…が…何、だ？」

男が咳込みながら呟く。

「何だ…やっぱ対したダメージは与えられないか」
俺は残念そうに呟いた。

「まあいいか…行け！」

俺は男に猶予を与えないよう、部屋にいる約半分のクリボーを男に突っ込ませた。

そして、先ほどもより大きな爆発と爆発音がする。

「……………っ、こ…口……………ス!!」

煙りが晴れる、そして俺は男が今だ立っていた事に驚いた。
弱いとはいえあれだけの爆発を喰らったのだ、無事な訳がない。

「ツカ!」

そして男が鬼のような形相でナイフをその手に持ち、突っ込んできた。

だがそこに再びクリボーが割って入る、爆発、……………そして男はもう動かなかった。

「……………ユーいくら何でも殺人は……………」

「いや殺してねえよ!? 気絶してるだけだからね!」

とりあえずと俺と黒子は偏光能力の男を連れてビルを出た。

その後駆け付けた警備員に男達を引き渡した。

男の様子に若干引きつつ俺は能力を使用して多少なりとも疲れたのでそのまま家路に……………

「何処に行くつもりなんですのユー?」

つけなかった、黒子に肩をガッシリ捕まれ俺はそのまま支部に直帰、その後無理やり仕事をやらされた。

その後、夜遅くまで仕事をやらされ（普段サボってるツケらしい）
、とりあえずジュースでも買おうと思いコンビニに入り……

そして俺は今……

「アッハア、どうした三下ア、その程度かア？」
アクセラレータ
一方通行と戦っていた。

どうしてこうなった……。

15話 毛玉と増殖と一p: (後書き)

随分と遅くなってしまいました。

不定期にも限度があるだろマジでorz

16話 一方通行

偏光能力者と戦い、仕事と戦い、俺は疲れた体にジュース（オイル）を入れるためコンビニに寄った、中には客が二人と店員が一人。特に何かを気にする事なく入り、後に後悔する事になった。

「全員動くなあ！」

入って三十秒ほどで客の一人が銃片手に叫び出した。

所謂強盗というやつだ。

犯人は店員に金を出すように指示、俺は珍しい物を見るように言いなりになるフリをしながら強盗を見学していた。

だがそこで、もう一人いた客、缶アクセラレータコーヒーを大量に買い込もうとしてる白髪、一方通行が強盗を無視するようにレジに商品を持って行った。

「おい、てめえ何勝手に動いてやがる！」

強盗が一方通行に銃を突き付けた。

しかし一方通行は関係ないという風に支払いを済ませる。

「釣りはいらねえ」

そう言って出て行こうとする一方通行の顔の横を弾丸が通り、コンビニにドアに当たる。

「次動いたら当てるぞ！」

銃を向けたまま脅すように強盗が言った。

一方通行は怠そうに首をポキポキと鳴らし臨戦体制へ。

ここで俺は柄にもなく、『あの強盗助けるかなあ』とか考えてしまった。

当麻の事が笑えない状態である。

「はあ：しょうがない、風紀委員だ！」

腕章を見せつけながら俺は強盗に言った。

「風紀委員だと！？、チ！：おい動くな！」

そして強盗は、あろうことか一方通行を人質にしたのだ。

一方通行の後頭部に銃を押し付けて叫ぶ、（一方通行が）いつキレてもおかしくない状況である。

「なっ：おいやめろ！」

「ヒヤハハハ、動くなよ？動くと：「いいから止めれ！」……？」

店員が空気だが知った事じゃない

「いいか！？今すぐそこを離れろ！死にたくなければ離れろ！」

「は？今は俺が命令する立場なんですけd……」

「うっせえ！いいから今すぐその白髪から離れやがれ！」

ここで一方通行が僅かに反応したが俺は気づかず続けた。

「てめえもまだ死にたくねえだろ！？死にたくないならその白い悪

魔から銃口を離し、その男女に土下座で謝りやがれ！」
おとこおんな

「いや……あれ？見えてる？銃？」
これ

「見えてるから言っただろうが！いいから早くそのロリコンから離れ……」

俺が言い終わる前に、強盗の体が飛んだ。

店の商品棚に激突し意識を失う強盗、怒りのオーラを出す一方通行、先ほどの自分の言動を思い返し青ざめる俺。

「よオ随分と舐めた事言ってくれるじゃねェか三下ア」

「ま、まさかあ…一方通行さんにそんな舐めた口何て言える訳ないじゃないですかあ」

「ほう？つまりお前は俺が学園都市最強のレベル5、一方通行と知って挑発してきたって事だなア？」

「いやあ俺みたいなレベル1程度が一方通行さんを挑発なんて出来る訳ないじゃないですかあ」

もう媚び媚びである。

「じゃあさっきのは何だったんだア？」

一方通行の問いに対する答えが見つからない。

先ほどの言動は焦って気づかず言ったものだった。

そして俺は答えが用意できずつい……

「真実」

と答えてしまう。

「分かった……殺す！」

殺意100%、そしてなんやかんやで偏光能力者と戦ったあのビルまで逃げてきて、今現在一方通行と死闘を繰り広げていた。

「召喚！クリボー、魔法発動！増殖、続けて機雷化！」

泣き事を言っても仕方ない、こうなったからには意地でも生き残る！

そして召喚したクリボーが増殖、一方通行に突っ込み自爆する。

だが肝心の一方通行は涼しい顔で笑っていた。

「ヘエ……おもしれェ能力だが、俺には通用しねェなア」

やはり駄目か…一方通行へダメージを与える方法、まだ考えつい

てねえんだよなあ……

「買発動！デモンズ・チェーン！」

だが、物は試した。黒子の能力も封じれたんだしこいつにも効くかもしれない！

「……はあ…散々吠えてこの程度たア泣けてくるぜイ」

しかし、鎖が絡まる前に一方通行に弾かれた。どうやら完全に捕らえてからでないと効果は発動しないようだ。

一方通行がため息を吐いて幻滅する。

そしてその顔は笑い顔に変わった。そしてそれはとても残虐的な笑顔で――

「もう終わりかア？だったら次はこっちの番だなア！」

一方通行がこちらに詰め寄って来る。

予想よりも遥かに早い一方通行の動きに俺は遅れをとるが、それでも自分目掛けて伸びて来る腕から回避するには十分な時間だ。

俺は間一髪で右に攻撃を避けて次の動きに移ろうとする。

……だが

「全然遅えェ！」

一方通行と俺の今いる階は二階だ、そして一方通行は地面を思い切り踏んだ。

「ッな！？」

一瞬の浮遊感、そして俺が自身が浮いている事に気づいた瞬間、俺は下の階に落ちた。

俺は痛みで顔を歪める、いっぽう一方通行は興ざめたようにテンションが下がっている。

「はあ、お前もういいわ、もう飽きた」

そう言って立ち去る一方通行、俺は安堵感から一気に体の力が抜ける。

ヘタレ？んな事知らん！リアルに見る一方通行はマジで怖いんだからな！ちゃんと対策立てて挑むならまだしも、こんな急じゃ最初からクライマックスすぎる！

そして、一方通行がビルから出る直前に口を開く。

「だからこれで終わりにしてやる…運が良けりゃア生き残れっかもなア」

その言葉の後、一方通行が横にあった壁を殴った。

瞬間、頭上から何かが崩れる音が聞こえる。

「どうしてかは知らねエがこのビル、大分ダメージを蓄積させてやがる…まあ俺のせいでも多々あるがなア」

そして、一方通行はビルから出て狂ったように笑いながら言った。

「…ク、クハ…アハハハ！、じゃあな三下アもう会えねエだろうがなア！」

そう一方通行が言った直後、ビルが轟音を立てて崩壊する。原作で黒子がやったように一方通行がビルを支える柱を破壊したのだから。

そして去って行く一方通行を見つめながら、俺は瓦礫の海に沈んだ。

16話 一方通行（後書き）

とりあえず主人公敗北、まあ本編で勝てばいいか本編で。

ちなみにビル崩壊のあれそれは成る物は成るんです。科学的説明がどうたら言われても途中経過を省いた事にします。

成る物は成るのです！

……… 適当ですいませんorz

16. 5話 とある最強の青眼白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）（前巻）

外伝的な何か、遊戯王成分多めにしようとしたけどそうでもなかった。

読まなくても本編に支障は多分出ないです。

時間的にはステイルさんと戦う直前、インデックスさんと出会った日の昼頃です（一応この日主人公が走り回ってた理由の話です）。主人公はみんな大好きなあの……

16. 5話 とある最強の青眼白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）

とある高校のとある教室、俺は今現在その場所で自習を受けている。

「っし、終了〜！」

そんでこれにて自習終了。

え？早い？知らん！

「げ、ユーもう終わったのかよ!?」

前の席に座る当麻が聞いてきたので俺は得意顔で「あたばーよ！」と返す。

「まあユーやんは不真面目な授業態度のせいで補習に呼ばれてるよ
うなもんやからな」

当麻の席の隣の席に座る人物、アオピンも会話に加わる。
ちなみにアオピンと土御門は俺の事を「ユーやん」と呼ぶ。

「はーいその三人、いい加減にしないとコロンブスの卵ですよー
？」

勿論補習中なので当然小萌先生に注意された。

「深導ちゃん？そんなに学校に居たいなら無理して帰らなくても
いいんですよー？」

「いゝいいえ遠慮します、それじゃあ先生また明日」

「はい、また明日なのですー」

これ以上いたら残されそうだったので俺はそそくさと教室を出た。

そして此処は誰もいない廃ビルの中。

「今なら誰もいないし、特訓がてら何か召喚してみるか」
まず最初の不幸はそんな考えを起こしてしまった事。

そして、二つ目の不幸は――

「そうだ！前々から考えていたあの人と呼んでみよう！」

――その”あの人”を呼んでしまった事だ。

「召喚！正義の味方カイバーマン！」

言葉の後に、目の前の空間が光に包まれる。

そして、光の中から奇妙な仮面と格好の人物が姿を現した。

「人間、ここは一体何処だ？」

目の前の人物、というかモンスターが周りを見回しながら言った。

「ここは学園都市って所だ……つーかホントに呼べたよ、夢じゃないよな？」

俺、遊戯王で海馬大好きなんだよな。正確にはカイバーマン（こいつ）海馬じゃないけどそれでも十分感動する。

……と、感動に浸っているとカイバーマンが何処かへと歩き出した。

俺はカイバーマンの肩を掴み止めた。

「さて、インデックスが心配だからそろそろ消えていいぞ」

そう、朝会ったインデックスと名乗る少女は多分今日中に神裂に切られる。

だから俺は出来るだけそれを防ごうと考えていた、……まあ防げなかったら原作通りに動くが。

そして振り向いたカイバーマンの口から衝撃の一言が。

「KO☆TO☆WA☆RU！」

……聞き間違いか？

「俺は誰の指図も受けん！それに、この街に少し興味が出た。」

……はい？

「……えーと、カイバーマンさん…カイバーマンさん以外のモンスターは全員俺の命令を聞いてくれるんですけど…」

スピード・ウォリアー、E・HEROネオス、ext

あれ？例えのモンスターに妙な共通点が……気のせいかな？

「ふうん、この俺をそこの雑魚と一緒にするな！俺は…正義の味方！カイバーマンDA！」

ダメだこいつ…早く何とかしないと…

「……って勝手にどっか行くんじゃねえ！てめえが目立つと俺まで目立つちま…「ええい黙れ虫ケラめ！」……（主人に向かって虫ケラ呼ばわりしやがったよこいつ!?）」

「何人たりとも俺のロードの邪魔はさせない！現れろ！ブラッド・ヴォルス！」

カイバーマンが言った直後、巨大な斧を持ったモンスターが……
ってかこいつモンスターのくせにモンスター召喚しやがった！

「ブラッド・ヴォルス、その虫ケラを片しておけ！」

カイバーマンの命令通り、ブラッド・ヴォルスがその手に持つ斧で攻撃してきた。

俺は振り下ろされた斧を後ろに飛んでかわす、斧が地面に減り込む、どうやら本当に実体化してるようだ。

「って何で俺は自分の能力に殺されかけてんだ……アホみてえ……」
ガックリと肩を落とすが敵は待ってくれない、空気の読めないやつめ！

「……ならせめて実験に付き合ってもらおうか！ブラック・マジシャン！」

俺は最高位の黒魔術師を召喚する。

ブラッド・ヴォルスが標的を俺からブラック・マジシャンへと変更し、斧を振るった。

「罨発動！マジカル・シルクハット！」

ブラック・マジシャンが四つのシルクハットの中に身を隠す、その中の一つに斧が直撃するも中身は空だ。

「魔法発動！千本ナイフ！」

そしてシルクハットの一つから無数のナイフが飛び出しブラッド・ヴォルスに突き刺さる。

そしてブラッド・ヴォルスは割れるように消えた。

俺はそれを確認した後自身のモンスターを消滅させる。

「（ふむ、やはり魔法・罨をモンスターに向けて使う事、モンスターに使わせる事は可能だったか）……さて、カイバーマンを探さないと……めんどいな」

そこには既にカイバーマンの姿はなかった、俺が戦ってる間に去って行ったのだろう。

俺は疲れた体にムチ打ってカイバーマン搜索を開始した。

side out

面白い、街中を堂々と歩きながらカイバーマンは思った。

時折り何かしら囁く声が聞こえてくるが知った事ではない。

「（何あの格好、コスプレ？）」

「（うわダッサ）」

「（ちょwww笑っちゃダメだってwww）」

……知った事ではない。

学園都市の科学技術に驚嘆しながら、カイバーマンは我が道を行く。

「…ハアハア」

とある路地裏を一人の少女が走っていた。息が切れ切れになりながらも懸命に少女は走る。

そして少女が曲がり角を曲がった直後、少女の後ろの壁に炎が直撃する。

「……はあ、いい加減諦めたらどうだい」

焦げた臭いが漂う路地裏で、赤髪の魔術師が言った。

しかし追われている少女、インデックスはそれに応えずただ走る。赤髪の魔術師は少女への問い掛けをやめ、少女を追い詰めるべく足を踏み出す。

「悪いがそこから先は壁があって通行止めだよ、大人しく諦めた方が身のため……」

言葉はそこで途切れた。

魔術師の視界に少女の姿はなく、代わりに無残にも崩れ去った壁だけが残されていた。

「……おかしいな、禁書目録は魔術は使えないはず……」

だとするとこれを壊したのは全く無関係な人間という事になる。

「ツチ……全く持って運が悪い」

そして赤髪の魔術師は悪態をつき、続けて禁書目録の追跡を開始した。

「……ここまで来れば」

とある橋の下に身を隠し、インデックスは安堵のため息を吐いた。当麻の家を出て数刻後、インデックスは先程の魔術師に襲われた。魔術師の放つ炎等、いつものインデックスなら恐るるに足りない。しかしとある少年の右手にインデックスを守る教会は破壊されてしまった。

一撃でも喰らえば命の危険が、更に彼女の十万三千冊の魔導書が悪い魔術師に渡ると、それだけで世界規模での危険になる。

だから絶対に捕まる訳にはいかない……！

彼女がそう決意を再度固めた所で――

「……鬼ごっこはここまでのようだね」

魔術師の声が聞こえた。

「なぜ探知できるのか？……という顔をしてるね」

敵の魔術師は完全に自身の位置を把握してる、なのでインデックスは仕方なく魔術師の前に姿を現した。

「うん、私の『歩く教会』はもう機能していない、なのに何で私の位置を特定出来るの？」

赤髪の魔術師はくわえていたタバコを捨てて答える。

「なあに、昨今は便利な物が溢れ返ってる時代だからね」

そう言って魔術師が見せたのは何らかの機械だった。

「ちよっと発信機を付けさせてもらっただけだよ」

魔術師がインデックスの肩辺りを指刺す、インデックスは急いで肩を確認する。

すると肩に付いてる小さな機械を発見した。

インデックスは苦々しい顔をした後それを川に投げ入れる。

「今更そんなもの壊された所で、何にも痛くないんだけどね」
そして魔術師が自身の魔術で炎を出す。

「暴れられても迷惑だ、ちよっと眠っててもらおうよ！」

そして魔術師はインデックスに向かって炎を飛ばした。

「（――迷惑何かにはならねーよ!）」

迫る炎を見つめながら、インデックスの頭を過ぎったのは二人の少年だった。

自分の立場を話しても迷惑にはならないと言った少年。
頼ってくれと言った少年。

やっぱり頼るんだったな…、と半ば諦めかけたその時――

「防御輪!」

炎は突如現れた円形の物体に遮られた。

「……え?」

状況が理解できない、インデックスは敵の魔術師を見た。彼もまた、困惑の表情を浮かべている。

「ふうん、随分と騒がしいから何かと思ったら、只の雑魚か」

その場に現れたのは白い仮面に素顔を隠した我らがHERO、カイバーマン。

「ツな、僕が雑魚だと!?」

えらく憤慨した魔術師がカイバーマンに言った。

「ふうん、弱者をいたぶる事でしか強さを証明出来ない雑魚を雑魚と呼んで何が悪い?」

余裕の表情で返すカイバーマン、するとその後座りこんでいたインデックスが焦ったようにカイバーマンに言う。

「た、助けてくれた事にはお礼を言うけど今は逃げて!私は大丈夫

だから！」

魔術師の力をよく知るインデックスはカイバーマンを心配して言った。が……

「……貴様、あの程度の雑魚に俺が遅れをとると言うのか？」

何故か怒り出すカイバーマン。

「それに、貴様を助けたつもりは毛頭ない！あの炎が目障りだっただけだ！」

もはや何を言えいいのか分からないインデックス。

「……まあ僕は君を逃がすつもりはないんだがね」

そう言って魔術師は自身の周りから火柱を出した。恐らくそれらを操りカイバーマンを消し炭にするつもりだろう。

「ほ、ほら！私は大丈夫だから早く逃げ……」

インデックスが言い終える前に、カイバーマンが手で制する。

そして、魔術師を見て笑った。

「ほう、雑魚の分際でこの俺に勝負を挑もうとは見上げた根性だが……」

魔術師が火柱を一齐にカイバーマンに向かって放った。

「片腹痛いわ！攻撃の無力化！」

「……何！？」

魔術師の炎はカイバーマンに当たる直前に何処かへと消え去る。

「ならば次は俺のターンだな」

「……ッひ！？」

カイバーマンの威圧に押され、一步後ろに下がる魔術師。

「貴様に、圧倒的な力の差というものを見せてやる」

辺りが静まり、空気が張り詰めていく。

その異常な雰囲気、赤髪の魔術師だけでなくインデックスまで恐怖を覚えた。

「出でよ！青眼の白龍！」

直後、空気が震えた。

空から光が降りて来る、そして光の中から白き龍が召喚された。

「な…何だこれは…」

理解出来ない、赤髪の魔術師は思う。感じる力、それは人間のそれを遥かに越えた。

まさに…

「…神と同格の」

「フハハハハ、行けえブルーアイズ！」

龍が口を開く、そして一点にエネルギーを集めて、

「滅びのバーストストリーム！」

放った。

side in

俺は結局、カイバーマンを見つける事が出来なかった。

しかし、そろそろ夕方という時間に唐突にカイバーマンが消滅した。

どうやら消されたというより自ら帰ったらしい。飽きたのだろうか？

とりあえず心配事がなくなった俺は、腹が減ったので牛丼を食いに行った。

side out

とある路地裏、そこにいるのは二人の赤髪の魔術師。

一人はカイバーマンと対峙したそれ。

もう一人はイギリス清教の魔術師、ステイル＝マグヌス。

「な、何なんだお前は？」

魔術師が言う、ボロボロの服に髪、満身創痍のその姿に朝の彼の面影はない。

「……Fortiss31」

ステイルの答えに顔を青ざめる魔術師。

「う……うわああ！」

暴れるように炎を出す魔術師、しかしそんなものステイルに通用するはずもなく。

「魔女狩りの王！」

ブルーアイズの一撃から奇跡的に生き残った魔術師は、その日骨まで灰になり、消えた。

16. 5話 とある最強の青眼白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）

（後妻

海馬じゃなくてすいません、カイバーマンです。

とりあえず触れていなかった部分の補足でも……

Q. カイバーマンとインデックスは魔術師を倒した後どのようなにしたのか？

A. カイバーマンが一方的に去っていきました。インデックスがお札をしようとしても、俺のロードがどうたら言って。

ちなみにインデックスが当麻の家に戻った理由は今回の事をきっかけに『主人公ズを頼ろう』と思い戻った、という裏設定があったりなかったり……（↑どっちだ！？）

Q. 赤髪の魔術師の名前等は？

A. なし、所詮はモブキャラ！

Q. カイバーマンはどうして帰ったの？

A. きつと飽きました。彼のロードは彼にしか分からないのです。

こんなもんでしょうか。何か分からない所があれば感想まで、とりあえず感想書いてくれればそれで（殴

17話 フレンダ（前書き）

「結局、浜面の出番何てなかった訳よ！」

17話 フレンド

「亜空間物質転送装置！」

落ちてくる瓦礫が頭に当たる直前、俺は間一髪でそれを避ける。

んで、亜空間で「三分間待ってやる」状態から元いた場所へ戻る。
そして目の前に広がるは瓦礫の山。

「うわっ！瓦礫やば！……ってこのままじゃ警備員か風紀委員から
職質受けかねえな」

という訳で、俺はスタコラサッサとその場を後にした。（注 彼
は風紀委員です）

まあ一方通行との決着は妹達シスターズの時に着けるか……出来るだけ当麻
に戦わせるよう動くつもりだが。

そして俺は今自身の学生寮についた訳だが……

「……修繕……だと!？」

そういやステイルさん十四才と戦闘りましたね。

だから一日かけて直すんだと、

その間住めないんだと、「屋根くらい自分でどうにかしろコノヤ
ローだと……」

………

「……ってこんな時間にどうにか出来るかあああ!」
現在時刻は日付が変わって7月22日の34分……。

勿論、銀行なんてとうに閉まっている。
金もない、ツテも……

「支部はなあゝ、仕事しなくちゃだからなあゝ」

小萌先生宅？ダメだ、当麻にインデックスでもう定員オーバーだ。
入れても勉強させられそうでヤダ。

土御門……は、当麻の部屋の隣だったしなあ、今頃は妹のトコに
転がり込んでるのか？

アオピンは家知らないし…。

美琴と黒子の部屋は……論外。

「飾利や涙子……って論外に決まってんだろ！世間的に」

あれ？俺今宿なし？ホームレス放浪者？

漢字にしたらかッコイイ何て思ってたじゃねえよ俺！

という感じで自問自答して早一時間……

「……本格的に公園かこりゃあ」

今俺は公園にいる。

いつの間にか『犬』に『ラジオ』、『ダンボール』の宿無し三種
の神器も着こなしずみだ。

「……不幸だ」

この不幸当麻以上じゃね？

つかあいつフラグ乱立させといて何が不幸だ死ね（↑荒れ気味）

そんな風にうなだれていると、何か音が聞こえてきた。
パンツと言う乾く音、それはまるで……

「銃声か？」

こんな時間にこんな場所でこんな音、多分暗部絡みの何かか？

……そういや暗部にはまだ接触してなかったな、いや好き好んで接触するようなものじゃないか。

「……うん、興味出た」

俺は呟くように言って音のした方へ歩き出した。

歩く事数分、そこにいたのは遺体进行处理するただのモブキャラ。
そして「なんだメインじゃないのか」等と隠れてため息を吐き、
その場を後にしようと後ろを振り返ると……

「……あ」

そこには拳銃片手に佇む金髪少女の姿があった。

「で、何してんのお前？」

俺は動じずに目の前の少女に質問した。今更拳銃くらいでびびってたら学園都市ではやっていけない。

……って相変わらず学園都市治安悪っ！誰だよ風紀委員は……あ、俺だ。

「何一人でぶつぶつ言ってるの？ってか結局君は一体こんな所でこんな時間に何してる訳？」

「宿探し」

「……え？」

少女の問いに即答する俺。

「とある事情で今日は寝るトコないからこんな時間にホームレス状態だ、ほれ宿無し三種の神器」

そう言って『犬』、『ラジオ』、『ダンボール』を披露する俺。

少女はしばらく安心して……

「……っぷ……アハハハハ！そんな理由で今君は殺されかけちゃってる訳！？」

何か突然笑い出した。俺も立場が逆ならきつと笑うだろうからあえてツツコまない。

「まあお前がその銃下ろせば俺は殺されなくて済む訳だが」

「ぷくく……それは無理な相談な訳よ、結局はお決まり通り目撃者の口を封じろってね」

笑いながらも銃口を俺の頭に向ける。

ってかこいつ笑いながら人殺そうとしてるよ、危ない人か？

「ふむ、じゃあ俺が殺されないようにするにはどうすればいいんだ？セオリー通り『服従を誓うから命だけは』とか言えばいいのか？」

「うーん、自由に使える捨て駒は魅力的だけど君何か貰ってもねえ」

「うわ酷！？」

「………は」

「……は？」

「っクシュン！」

パンッ！と、再び鳴り響く渴いた銃声、少女は「……あ」と一瞬焦り、

「……まあいいか☆」

と車で偶然虫を踏み潰したかのような態度でクルッとUターンした。

「……いやいやよくねえだろコレ」

そして先程まで黙って倒れていた俺は若干引き気味に言った。

「……え？あれ？」

俺の生存に困惑する少女、ってか何かこいつどっかであったような……

最近は原作とこっちの知識が混ざって来て、只でさえうる覚えの原作知識がかなりあやふやになっていたりする今日この頃。

「いやだからくしゃみで普通人を殺すのかと……」
バン！

「だから撃つなよ！？」

バン、バン、バン！

「いや、ちょ！？」

バン、バン！……カチャカチャ

「うおい！？何弾補充してんの！？可愛い顔してどんだけ残虐何だよ！何美女と野獣が同棲してんだよ！！」

「……つかしいなあー、何で君は死なないの？」

「あ？それはアレだよ、能力的な何かだよ」

「何だ、結局は高位能力者だったって訳、というか別に君命乞いしないでもよかったんじゃない？」

何か勘違いしてるがスルーしよう、メンドイし。

「……という訳で俺はそのまま帰らせて貰うわ（そろそろミストボデイ切りたいし）」

そう言っただけ俺は立ち去ろうとする、とりあえず平気で人殺す非一般人から早々に離れたい。

あれ？おかしいな黒子がまともに見える。

「で？どこに帰るつもりなの？」

ドキリとする、俺、そういえばホームレス真っ最中だった。

「君を殺すのには失敗したけど、とりあえず拉致ってれば結局殺した事と同じな訳だし」

……うわあ、行きたくねえ！何が楽しくて自分殺そうとしたヤツの所に行かなきゃならんのだよ！

「ちなみに、自主的に来てくれれば私的には凄く楽で助かるんだよねえ、大丈夫！君の生活はギリギリ保証するかもよ！」

「いやギリギリなのかよ！？しかも『かも』じゃ不安しか残らねーじゃねえか！？」

「じゃあ結局：君はどうするつもりなの？」

……何で俺自分殺そうとしたヤツと親しげに喋ってんだろう？

「はあ：結局俺はお前のトコに行く羽目になる訳ね」

ホームレス状態よりは百倍マシだ、世間的に。

あれ？五十歩百歩じゃね？

「あれ？何か感染^{うつ}っちゃってる？……まあいいや、じゃあ改めまして……」

そう言っって少女は右手を差し出した。

「私は『アイテム』のフレンダよ、よろしくね！」

「あ：ああ、俺は深道 勇、ユーって読んでくれ……って…」

アイテム↓フレンダ↓フレ／ンダ。

「……あ」

「？」

結局、俺は暗部と関わってしまったって訳だ。

17話 フレンダ（後書き）

不安がいっぱい！フレンダの口調！

今日帰りに超電磁砲の残りを買って、これだけでフレンダ書きました。

ちなみにフレンダが敵を呼ぶ時どう呼ぶか分からなかったんで勝手に『君』に決めました。

理由？美少女に君って呼ばれたら何か萌え……って、ギャー！
！（↑殴る蹴るの暴行を受ける作者）

「俺の知ってるフレンダはこんなじゃない！」って人、ごめんなさい。平行世界と割り切ってください（土下座）

さて次回で別のアイテムメンバーも登場（予定）です。

ただ今まで色恋沙汰皆無だったユーがフレンダにフラグを立てるのもアリかと……

そのためなら別のアイテムメンバー出さずに甘い空気を作ってもいいかな？と……

……まあそんな事皆無でしょうけどね！きっと作者が途中で飽きてギャグに走るでしょうけどね！

長々と付き合わせてしまいすみませんでした。
ではまた次回。

18話 7月22日? (前書き)

一話で一日と思ってたけどそうならなかった!

18話 7月22日？

ここは学園都市にある暗部組織『アイテム』のアジト。

『アイテム』とは学園都市上層部や暗部組織の監視や暴走の阻止そして学園都市の不穏分子の抹消といった事柄を目的とした組織である。

必要とあらば人だって殺すこの組織に俺が関わりを持ったのは、ほんの数時間前だ。

公園暮らしよりは百倍マシか。……等と考えたのが運の尽きか、それとも一方通行と接触したのがそもそもの不幸の始まりか……。

とにもかくにも暗部という暗い闇の世界に踏み込んだ俺は今……。

「ねえユー？頼んでたシャケ弁買って来てくれた？」

「っていうか結局サバ缶がどこ探してもない訳何だけど？」

「ちょ！これ私の言った映画と超違うじゃないですか！……しかも
よりにもよってこんな駄作を超借りて来る何て！」

適当にテレビを眺めながら言うのは学園都市のレベル5にして第四位の超能力者、むぎのしずり麦野沈利。

次に先程から俺の持っていたコンビニの袋を横から掻っ払い、必死にサバ缶を探しているのはフレンド。

そして（俺の金で）借りて来た映画に文句を言いまくりながらも
視聴の用意を進めているのは絹旗最愛。きぬはたさいあい

「大丈夫、私はそんなしんどいを応援してる」

最後にピンクのジャージを着こなしながら俺を励ましてる(?)

少女は滝壺^{たきつぼりこう}理后。

ちなみに俺を苗字で呼ぶ数少ない人物だったりする。

さて、とりあえず何故俺がこんな使いっパシリの扱いを受けているのかと言うと……

フレンダと共にアジト到着↓事情説明↓麦野「へえ銃で撃つても死なないんだ。なら私の能力だったらどうなるかしら?」↓俺「ちよ、おま!」↓必死に命乞い↓雑用決定!↓買い物行ってこいハゲ!↓帰宅↑今ここ。

そして俺はここで一言。

「……不幸だ」

つーかまだ禁書目録争奪戦すらも終わってねえのに何この展開? 何で俺こんなところにいるんだっけ?

「……あれか、日頃の行いのせいか……」

等とぶつぶつ言っていると、ようやく見つけたサバ缶を手にはフレンダが問い掛けて来た。

「そういえばユーの能力って結局何な訳?」

これを聞かれるのは何回目だろうか……やっぱ学園都市に住む人間が他人の能力に興味を示すのは当たり前なのか?

いつの間にか麦野や絹旗、滝壺までもが集まっている。

「というか俺の能力くらい簡単に調べられるだろ?」

俺はとりあえず素直な意見を言ってみる。暗部組織の彼女達ならばそれ位余裕だろう。

そしてそれに対する返答は「どうして俺の為にそんな面倒くさい

事に時間を使わなくちゃいけないの？」と言うものだった。
しかも四人全員から。

俺は軽く落ち込みながらもコホンと咳払いして言った。

「能力名は召喚士でレベル1、後は適当に調べ………ってえ!？」
言い終わる前に、フレンダが何処からか出した銃器で頭を殴って
来た。

「結局ユーは嘘をつくのが下手だったって訳ね」

涙目で頭を抑える俺に哀れみの視線を向けるフレンダ。

「まあどうせつくならもちっとマシな嘘について欲しいわね」
と麦野。

「そもそも召喚士って能力名自体が超初耳ですしね」

「……それで、本当はどんな能力？」

呆れ気味の絹旗としつこく聞いてくる滝壺。

「まったく、嘘だと思うならバンクでも見てみるよ………そこでこれで
信じるか？」

ぼやきながらも能力発動。

俺はとりあえずクリボーを召喚する。

「……ッか！」

まず第一に反応したのは我らが麦ノン、フレンダは興味深そうに
見て、絹旗は他にも色々召喚できるか聞いてくる。

滝壺は滝壺でクリボーに触って楽しんでるご様子だ。

「まあ他にも色々出せるがそれはまたの機会だな、つかいい加減眠
いし」

目を擦りながら俺はフラフラとソファーの上へ倒れ込む。

何せついさっきまで部屋の掃除やら買い出しやらをさせられてい
たせいで寝不足だ。

というか寝てない。偏光能力者戦と一方通行戦のダブルパンチも

効いてる。

何やら横でギャーギャー騒ぐ『アイテム』一同を完全無視して、俺は死ぬように眠りについた。

……………

………は!?

眼が覚める。

しかしそこは『アイテム』のアジト等ではなく、真っ白な空間。俺を転生させた神のいる空間だ。

そしてふと気づくと、そこには何時から居たのか見慣れた神がいた。

というか神を見慣れているという事柄自体異常なんじゃないんだろうか?

魔術サイドの連中が聞いたらどうという反応をするか楽しみになるシチュである。

「久しぶり、という訳でもないかの」

神が言った。俺は面倒くさそうに頭をかきながら考える。

今回は馬鹿みたいに無理をしてないはずだ。という事はそれ以外、何か重要な話があるという事か?

そしてそんな俺の心中何かお構いなしに神は続ける。

「今日呼び出したのは他でもなく……」

……ゴクン

「お前さん、つまらなすぎ。もうちっと面白い事しろよJK」

……………

「………は?」

何？つまらん？面白い事？

「だからさあ、お前見ててもつまないんだよねえ、折角やった能力は決まった使い方しかしねーし、誰かにフラグ立てようとしねーし！」

いつの間にかキャラが変わってる神が言った。

俺はしばらく放心状態になり、

「……いやちよっと待て、って事はアンタ四六時中ずっと俺を監視してるのか！？つーか面白いって何だよ！？ってか……」

……

……

「キャラ変わりすぎだろテメェ！」

ガバッ！と体を起こしながら俺は叫んだ。

「……ちよ、超どうしたんですかユー？」

いきなり起き上がった俺に、ちょうど映画のDVDを抜き出す最中だった絹旗が聞いた。

「（……夢？いやでも神のやつ夢の中に出て来って形で干渉してくるから本物か！？……でも今考えるとリアリティなさすぎだし……うわぁ何かごっちゃになってきた！）」

起きた直後に頭を抱える俺。

「……まあいいです。ユー！」

絹旗に呼ばれて俺はそちらを向く。

するとそこには、映画のチケットらしき物二枚を持った絹旗の姿が！

「実はフレンダに超急用が出来たとかで、映画のチケットが一枚超余ってたりするんですよ」

要するにチケット一枚超余ってるから超ついてこいバカヤローとの事だ。

「……って別に俺何かに言わなくても麦野や滝壺を誘えば……」
そこで俺は気づく。いつの間にかアジトにいるのは俺と絹旗だけという事に。

「まあ私としてもそちらの方が超いいんですけど、先程から二人の姿が超見えないんですよー」

多分、その先程というのはフレンドが絹旗の誘いをドタキャンした辺りだろう。

俺は今だ半分眠ってる頭を掻いて立ち上がる。

「……まあタダで見れる訳だからいいか、暇潰しにもなるだろう」
そう呟いて俺は絹旗について行く事にした。

ちなみに映画館の建っている場所自体が複雑な道の先にあるため、そこへ辿り着くまでに何度か本気で迷子になりかけたのは秘密だ……。

そして辿り着いた映画館で最初の関門にぶち当たった。

「……いや、お前えさん……絶対15歳以上じゃねえだろ……？」

売り場のオッサン（つーか売り場にオッサンってどんな配置してんだよ!?）が呆れ気味に絹旗を見ながら言った。

どうやらこの映画、R-15指定を受けてる物らしい。

そして絹旗の見た目は大体12歳前後、というか実年齢もおそらくその位だろう。

「じゅ……15歳です！私は誰が何と言おうと超15歳ですよ！」
対する絹旗も反撃するがオッサンは引き下がらない。

「はあ……お兄さんからも言っていてくれよ？」

何か勘違いしてるオッサン。

そして俺が何か言う前に：

「な！？何でこんな超冴えない男が私の兄に見えるんですか！？」

絹旗が反論した。

「つか冴えないは酷くないカ？」

「うゝゝゝ、だから私は15歳だって超言ってるじゃないですか！？」

「だったら身分証明できるもん何か持って来る事だ！出来なきゃ諦めな！」

結局、俺は絹旗を引きずる形で映画館を出る。

ちなみに当の本人はガツクリと肩を落としながらも「次来る時はちゃんと用意すべきですね……」とかぶつぶつ呟いている。

「ちなみに言っておくが俺一応風紀委員だからな？犯罪じみた事はしねーぞ？」

「そんな事超分かってますよ……ってユーは風紀委員だったんですか？」

驚きながら絹旗が言った。

「だったじゃなくて現在進行形な」

そして俺はそれに答える。

「……人は見かけに超よらないというのは本当ですね」

「それはどういう意味かな絹旗さん……？」

引き攣った笑顔で言いつて俺は辺りを見た。

来る時も一度通ったのだが、この辺りはお世辞にも治安がいいとは言えない地域らしい。

そして、そこには当然そういった場所に似合う方々がいるもんで

……。

「……おい、そこのお前ちょっと待て」

イカにもな雰囲気のお兄さんからお呼びがかかる。

俺と絹旗は立ち止まり、そちらの方を見た。

ザッと10〜20人程の人の塊がそこにはあった。

その中の一人、リーダー格らしき人物がこちらへ向かって歩いて来る。

「(ほら！これって風紀委員の超出番じゃないですか?)」

「(いやいや風紀委員にも落ちこぼれてもんはいる訳で、こういうのは暗部の方の出番でしょ?)」

絹旗は楽しそうに、俺は面倒くさそうに言った。

そして何だかんだでリーダー格の男が目の前まで来る。

「……妹の手前悪いんだけどさ兄ちゃん？」

「何で私はいつも超妹扱いされるんですか!？」と絹旗が言うてるが無視。

つーかどうせタダで返してくれそうにねーな、だったら……

「簡単に言うと金と妹置いブゴォ!？」

男が言葉を言い終わる前に、俺は男の顔面を鷲掴みにして……

「あーごめん……」

そのまま地面へ叩きつけて言う。

「…手が超滑った!」

18話 7月22日? (後書き)

「フレンダは所詮超フレ／ンダですね!」

という訳でまさかの絹旗メインの話になりました。

どうしてこうなった…… (↑お前のせい)

とりあえずアイテム中心のオリジナル展開、もとい木原先生戦&a m p ; 神裂戦までの繋ぎはどうでしょうか? 正直さっさ原作進めた方がいい気がするorz

とりあえずこの22日と23日が終わったら脇目も触れず原作をやりたいと思います。

そしてそのため今必死に原作熟読してます。

19話 7月22日? (前書き)

／約二ヶ月ぶり／

すいませんマジごめんない、痛い石投げないで(泣)

言い訳するとガラリと環境が変わってけっこう忙しかったんです。
はい言い訳です。

そして暇な時にちよくちよく書いた結果がこれだよ!.....死にたい。

19話 7月22日？

ドシャン、という音と共に男が頭から地面へ突撃した。

俺はまだかろうじて意識を保っている男の頭上へと足を上げ、

「…へぶし！？」

勢いよく踏み付ける、何か変な声が聞こえたが知った事ではない。

「…さて」

そして俺は改めて目の前の集団を見る。

先程の俺の行動に恐怖する者、怒りを表にする者、特に何も感じてない者と色々いるが、今俺がやるべき事は一つ。

「絹旗……」

それは……

「…逃げるぞ！」

絹旗の手を引っ張って全速力で逃げる事だ。

勿論、戦う。という選択肢もあったが、こんな所で派手に能力使ったら実力隠してる意味が無くなる。

「ちょ…何で超逃げてるんですか！？」

「何故？めんどくさいからに決まっている！」

俺は間髪入れずに答える。

俺の答えに不服そうにする絹旗、だが俺は気にせずに走り続ける…

が…しかし、そのまま無事逃げきれぬ訳も無く、俺達は何時の間にか挟み打ちにされてしまった。

「さあて鬼ごっこもここまでだ、兄ちゃん」

男が言う。

「なあに、ちょっと半殺しにするだけだから…」
男が近づく。

「ちょっと妹さん借りるだけだか………へぶっ!？」
そして男が吹き飛んだ。

「……妹妹妹って、いい加減超うざいんですよねえ…」
男を殴り飛ばした大能力者（レベル4）、絹旗最愛がポツリと言う。

どうやら今までの経緯でかなりのストレスが溜まっていたらしい絹旗、何やらプチっという嫌な音が聞こえた気がして、

「何処をどう見たら私がこんな男の妹に超なるんじゃあああああ
!!!!!!」

そう叫びながら不良共を一人残らず薙ぎ倒していく。
まあ確かに映画見れないわ、行く先々で間違われるはで頭に来るのはワカランでもないが…

「(……キャラが変わる程嫌だったのか、俺の妹)」
何だか少し卑屈な気持ちになったのはみんなには内緒である。

「この口か!?! 私があんな奴の妹だと超ほざくのはこの口か!?!？」
「絹旗、そろそろストップ」

死屍累々とはまさにこの事である。

俺達にちよっかい出した不良共は全滅、絹旗が胸倉掴んでる彼もボロボロである。

「ユー？もう少し超待って下さい、もうちょいかりますから」

「いやいや、それ以上やっちゃもうイジメだから」

イジメダメ、絶対。

「ッち、超命拾いましたね」

「…なあ、正直俺お前の発言でメンタルボロボロ何だけど」

「……私ユーに何か超言いましたか？」

「いえ、もういいっす…」

自覚無し。多分一番たち悪いんじゃないか？

そんなこんなで家路（というか家とは言えないが）につく俺達。

「（つーか結局映画は見れないし、偶然にもタチの悪い不良に絡まれるし……今日は本当ついてないな…）」

「…偶然を装って雑魚共けしかけてみた訳だが……やっぱ一人の時にやるべきだったな」

絹旗達から少し離れたビルの上、少年とそこにいた。

見た目ガラの悪そうな…まあ実際にはガラが悪いなんてレベルじゃないその少年の視線はある一点に注がれている。

裏路地を歩く二人の男女、より正確には無造作へアーには程遠い気だるそうな寝癖の少年に。

「仕方ない次は一人の時に、俺様直々に行かせてもらうぜ…『召喚

士』」

そう呟き少年はその場から姿を消した。

その後何事も無くアジトに戻ってきた俺と絹旗。

「さて、後はもう大人しく寝てるか」と、適当なソファ―に歩み
よろうとした俺の肩をガシリと突如その人物は掴んだ。

「深導…付き合って」

「……………」

その人物、滝壺理后の申し出に俺はあからさまに『迷惑だ』とい
う顔をする。

「ありがとう深導…それじゃあ行こう」

どうやら気持ちは伝わらなかったようだ。

滝壺はダランと垂れ下がる俺の右手を強引に引っ張る。

「うん？どうしたの滝壺、デート？」

面白そうな物を見る目つきで麦野が茶化して来る。

「違う、ただ服を買いに行くだけ」

即答で拒否&用事を伝える滝壺。

読者の皆さんはとくに気づいていると思うが、先程の「付き合
って」という言葉は「（買い物に）付き合って」という意味だ。

決して恋愛フラグや一目惚れ、という都市伝説の類では無い。

この主人公にそんな物は（多分）有りはしない。

さて、メタ的な話はここまでにしてとりあえず俺達は適当なデパ
ートについた訳だが……………。

「…………おい、たまには違う服買えよ」

次々とお馴染みのピンクのジャージをカートに突っ込む滝壺に、俺は甲殻類的ツツコミを入れる。

「いやいやそんな『なんで?』みたいな顔されても……」

年頃の女の子は多少なりとも服には興味を持つ物では無いのだから、まあ俺の勝手な主観なんだが。

そして返って来た言葉は…

「深導は私に色んな服を着て欲しいの?」

質問で返された。

「いや、別にそういう訳じゃないけど……」

服なんて個人の自由、所詮はそういう事だ。滝壺がピンクのジャージしか着ないのも結局はそれだけの理由。

まあ別にどうでもいいしな、というかめっちゃ眠…………

「深導」

突然の声に滝壺の方を振り向いた俺は絶句した。

そこにいたのは可愛らしいピンクのスカートに、ちょっとダボダボだがそれがまた可愛いく見える暖色系（基本色はピンク）のパーカーを着た滝壺だった。

「…………どう?」

「いやいやどうって言われても!?!」

今気づくと彼女は試着ルームの中でカーテンを開けてる状態で立っている。

どうやら俺が少し視線を外した隙に試着したようだ（偶然にも試着ルームがすぐ傍にあるし）。

「…深導？どうしたの？」

硬直する俺を不思議そうに見つめながら滝壺が言う。

「…どうか不意打ちだった。」

原作での彼女は常にピンクのジャージのため私服を拝む機会は皆無で、それが以外と以外で……

要するに………

めっちゃくちゃ可愛いかった。

それはもうとあるレベル0に軽く嫉妬するくらい。

「……それで、どう？」

覗き込むように問いてくる滝壺、俺は出来るだけ冷静を装いながら答える。

「あ…ああ、可愛いんじゃない？」

「本当？」

「ああ、あれだあれ…『ギャップ効果』！」

「…分かった」

そして試着ルームのカーテンが閉まった。

その日の滝壺さんのお買い上げ品、ピンクのジャージ5着と試着ルームでの洋服ワンセット。

ちなみにパーカーとスカート、それにシャツ含め総額ピンクのジャージ約10着分。

「ってか明らかに無駄な出費じゃん、いいのかそれ？」

「私のお金をどう使おうと私の勝手、それに……」

「本当に『無駄』なのかは、まだ分からないよ」

そう言って彼女は僅かに微笑んだ。

「（つまり将来の彼氏のための一着って事か）」

俺は心の中で素直にこう思えた。

（リア充爆発しろ！！） 主に幻想殺しの少年や、元……いや未来の元スキルアウトのリーダーの少年が。

そして帰宅時のとある会話。

「そう言えば滝壺」

「何？ 深導」

「今回の買い物、何で俺を誘ったんだ麦野辺り誘えばよかったじゃん」

「麦野達は準備が忙しいだろうから、だから深導を誘ったの」

「ふーん、準備って？」

「うん、暗部の仕事の準備」

「……へえー」

「ちなみに深導も連れて行くって、雑用として…そう麦野が言っ
た」

「へえー……………あ？」

19話 7月22日? (後書き)

どう見てもデートです本当にありがとうございます (ry

試験勉強と小説……どっちを書くか迷うZE!! (王様風に)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488q/>

とある弱者の召喚士

2011年7月31日10時27分発行